

象牙鹿刻法

乾

石 准
繩 方

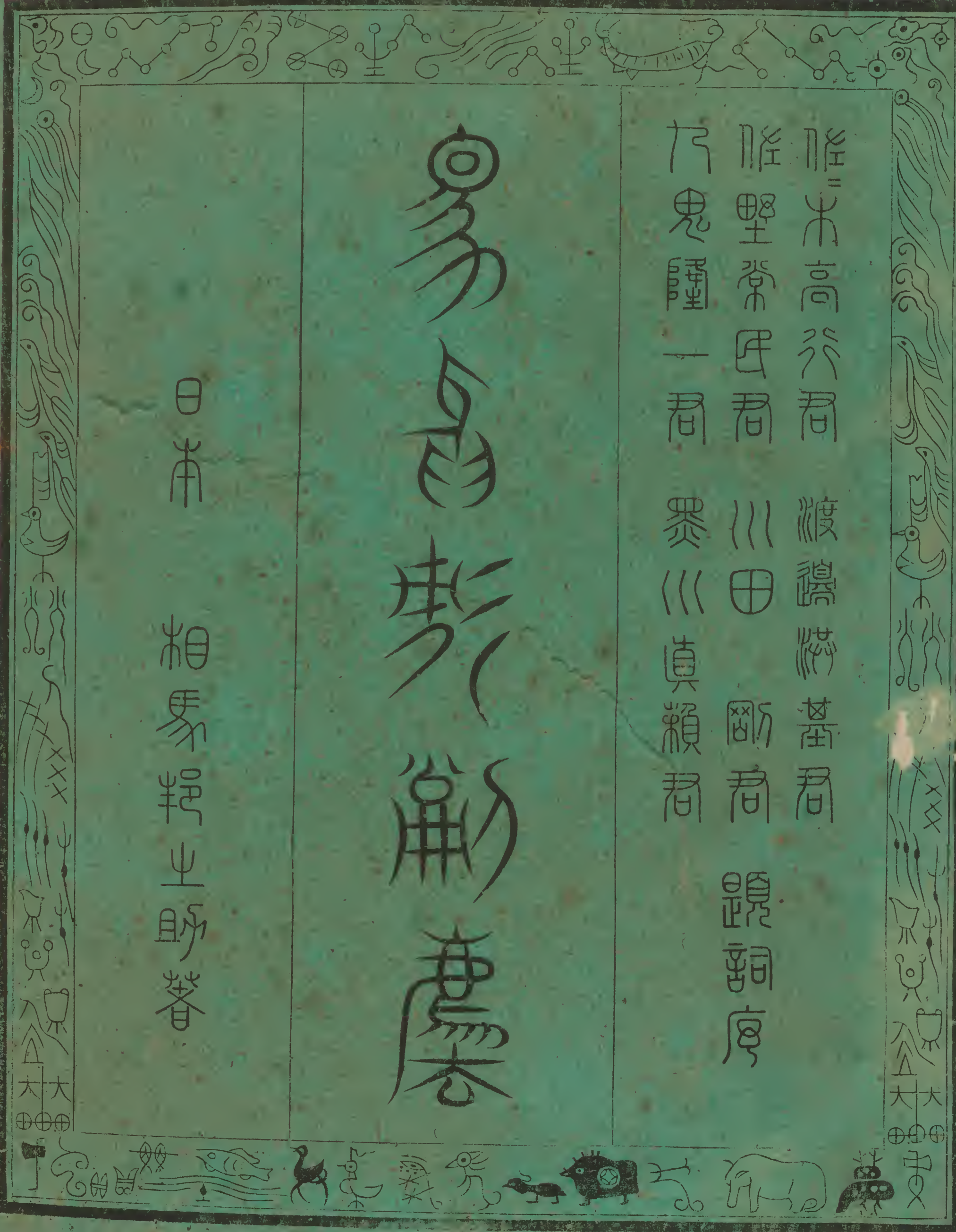


惟木高次君 渡邊滿基君
佐野常氏君 川田 剛君 舘詞序
乃鬼陸一君 奥川貞賴君

易 齋 齋 齋

日本

相馬邦生所著



觀矩
高可



高林 鑒藏

象牙彫刻法序



我邦繪畫周刻之術自古師授相承具有其法但未有筆之於書者夫口傳而手受之受者或遺之傳者或不悉固不如書之可據也頃者相馬仙齡著象牙彫刻法

以便初學。牙刻之行於諸美漸為
最新。今其出先成木石五金繪畫
蕭繡之書。將續之而出。仙翁以著
蓋為之先驅矣。若夫手精腕熟。
縱然自在。遊于法之外。則所謂默識
心會者。非文字之所能傳也。修美

術者宜求法於有形。而得神於無
形矣。仙翁乞序。因出與之。

明治己丑臘月。雪津漁叟題於
靜觀居之南軒。



大森惟中書



序



象箸見史記。象掃見毛詩。象尊象卮象路見周官。又徵之我國典。白牙尺。綠牙撥鏤尺。紅牙撥鏤尺。紅牙撥鏤竿子。見東大寺獻物帳。五位以上用牙笏。見大寶衣服令。三位

以上腰帶及內命婦櫛。聽用象牙。見延喜彈正式。而今正倉院寶庫所藏牙櫛牙笛及華帽。法隆寺牙尺及鍼筒。皆千餘年外物。則古人既已善治骨角。近世有一齋奉真正直印齋周山彤山等。巧刻人

物花卉鳥獸蟲魚之狀。殆為良工。山陽遺稿象墜記。足以見其一斑矣。陸奧人相馬君仙齡。夙工此技。近著一書。自寫形着色。以迄刀鋸鉅鑿諸術。逐次論說。插以畚画。名曰象牙彫刻法。就余七序文。余

嘗讀爾雅。象謂之鵠。角謂之
觥。骨謂之切。象謂之磋。蓋亦
當時之彫刻法。然今攷工記
殘闕。其詳不可得而知。近世
良工能辨於手。不辨於筆。而
君則手與筆兩辨之。使人一
目瞭然。有所自得焉。故余嘉

斯舉。總通上梓。弁一言於卷
首云。上章攝提格如月。文學
博士川田剛撰并書



序



凡百藝術自脫草昧之域以上
皆有典型而典型之立漸次
長進積數百年之工夫而成
後人更加意匠致精累巧

其進無有窮極此所以貴
於煉磨也本邦彫刻之術
既長機巧又饒雅致其所
製出中外珍之久矣但其術
師弟相授口傳手受無有成

書東京彫工會員相馬邦之介君
當今之志和也常愛之頃叩
其蘊奧筆之于書以為授業
之範名曰象牙彫刻法蓋欲
益精其術以揚國華焉余

らけと近や世にふねへこゝろあ
に成りしことゝ象を村へ
つくともいふにふねに果國
なり相馬ぬーふのふにふね
ふねなるふのこゝろ象は利はと
いふ、象をふねにふねにふね

ふねなるふのこゝろ象は利はと
いふ、象をふねにふねにふね
しりふねにふねにふねにふね
ちふにふねにふねにふねに
はふねにふねにふねにふね
ちあふねにふねにふねにふね
きふねにふねにふねにふね

夢にのりていふも、夢のたぐひ
夢のいふも、夢のいふも、夢のいふも
も天のうにひる人のあまゝい
ふうそくをふとせよ

明治廿二年二月 文芸部員川島



録大夢禪師
題彫刻法

山はくま
さきさきに
さきさきに

松もとわらうて

つるも

花乃ある

うは

成あ



彫刻所國旗六

自叙

去ル明治十五年、門生ヲ養ヒ、是レニ彫刻ノ道ヲ授ケント欲ス、種々方法ヲ求メテ、學ビ易カラントヲ試ムト雖モ、其適切ナル方法ヲ得ル能ハス、畢竟學力資財ノ及ハザルガ爲メニ、良方法ヲ得ル能ハザル者也、同十九年、門生ヲ辞讓シテ、自ラ單身トナリ、専ラ彫刻上ノ方法手段ヲ明カニシテ、後日ノ便ヲ得ントヲ計リ、孜々惜ラス工業ノ傍ラ、製作時間先後ニ必ス其形ヲ認メ、截リ碎方ノ未タ精密ナラザルモ、圖ヲ編シテ初學ノ階梯トナサント欲ス、而シテ其間ニ亦見聞ト諸書ニ雜出スル趣旨等ヲ得テ、之レニ圖画ト私見ヲ以テ稍修正ヲ加ヘ、彫刻上ニ適用センコトヲ以テセリ、故ニ解説ノ如キハ俗語アリ、畧語アリ、皆錯雜シテ章句ヲ成サバルベシ、看者之レヲ恕シテ、只其意ノアル所ヲ察セバ、余ガ幸福之レニ過キタルナシ、其編輯ノ次第ハ、先ツ起因目的及ヒ麓落道具ヨリ工場迄ヲ初メニ列シ、次キニハ、第一避俗愛銳ヨリ、第九蚋蜂逃生ノ間、余ガ心中象形ノ思想ヲ起スヲ主眼トナシ、故ニ規矩繩墨ヲ以テ是非善惡ヲ責メス、只道具及ヒ小刀等ノ使用ヲ練熟セシコトヲ務メ、漸ク運刀ノ進歩ヲ看ルニ及ンデ、名画良刻ノ諸品ヲ鑑ミ、精粹

ノ端ニ趣クヲ得タリ、亦ニ編ノ顔面、手足部ニ於テ、由申甲田等ノ十字面貌
及ビ手足ノ正斜仰伏等ノ形狀ヲ象リテ、全体ヲ作ルヲ學ブ、第十五處女
閑適ヲ彫刻スルニ當テ、大ヒニ悟ル所アリ、茫然削剥ノ一技ニ老ユルモ、到
底妙想至感ノ体ヲ表ハシニ、標目ナク、是ニ於テ、畢生ノ腦力ヲ此學ニ浮ベ、
全身ノ腕力ヲ此術ニ注ギ、萬有ノ彫刻物ニ向テ、眞想形ノ排列ヲ設ケ、自己
が行路ヲ定メ、修業ノ順序ニ惑ハザランヲ期ス、古人明カニ説ヲ爲サス
ト雖、氏不識ノ間ニ彫刻セシ物体ハ、自ラ眞想形ニ影彩ヲ備フル者ニ
シテ、其證ヲ舉レハ、希臘古代ノ彫刻品ハ、多ク裸体ヲ以テ、眞ニ迫ラシメ、印
度ノ佛像ハ、不動尊魔鬼等ノ如ク、想像ヨリ出テ、人ヲ感動セシム、我邦、鴨
川人形、奈良人形、及ビ飛彈彫等ノ如キハ、形狀簡畧ニシテ、尤モ清觀ヲ表ハ
ス、尚其妙想ト云フベキ一体ハ、彼十二天ノ如キ者ヲ云フ、是レ眞想形ノ体
ヲ發見シタル所以ナリ、若夫是レヲ標本トシテ、旅行セハ、五里復五里ノ遠
キヲ知レ、氏岐路ニ躊躇スル憂ヒナシトスルニ、庶幾ラント、門生童蒙ノ爲
メニ、上梓シテ聊カ述ブルヲ云爾、

于時明治二十二年七月孟夏

陸相邦謹誌

凡例

一 此書ハ、專ラ象牙彫刻上ニ関スル方法ヲ掲ク、故ニ象牙彫刻法ト名稱
ヲ附シタル者也、書中一二ノ号ヲ附セル設題數ハ、二十二ニシテ、其變
圖ハ、木地形ヲ除ヒテ、上底、前後、左右、都合八十一アリ、別ケテ乾坤ノ二
編トス、三編四編ハ、他ノ實業者カ經驗シタル、圖画ヲ掲載スヘシ、
一 設題ノ下ハ、元物ノ重量、寸法、製作ノ日月ヲ記載セリ、重量ハ、木地ノ時
價ヲ計テ時々比較スルヲ得セシム、寸法ハ、初學ノ子弟ヲ教育セシム
ルニ、假リニ、木材ヲ以テ象牙木地ノ形ヲ削表セシムルヲ務ム、製作ノ
日月ハ、一題号ヨリ二迄ノ間ヲ推算シテ、一個凡ソ幾日ヲ費シテ製ス
ルヤ、粗密ノ差アリト雖、氏大畧ノ日限ヲ期センヲ慮リ、
一 此書起稿ノ考按秩序ハ、日本美術協會、鑑畫會、東京彫工會、等ニ於テ、見
聞ヲ擴メ、思想ヲ養ヒタル者也、然レ、氏短才疎能ニシテ、克ク各會意ノ
アル所ニ進ムヲ能ハス、且書中ノ文章、圖画、筆耕共ニ各専門家ニ依頼
セシテ、余一己ノ手ニ編述シタレハ、誤字差意アルヲ免カレス、看者
夫レ之レヲ恕セヨ焉、

○目錄乾

彫刻起因及目的	一避俗愛鈍 <small>参考圖</small>	三心忙兩避
鹿落道具鋸諸類	二主美弃醜	三左右愛憐
雁木 併鑢十形	三牧童思婦	五舞踏演習
小刀燒方	四育兒嬉戲	五處女閑適
木竹小刀十三形	五勿侮長者	○真想形
象牙骨角刀廿四形	六貓兒失母	六戲花蛺蝶 <small>真</small>
金屬刀	七婦容可愛	七威伏靈蟲 <small>想</small>
比例線解	八新婦愛兒	八慈悲善惡 <small>形</small>
比例尺解	九納蜂逃生 <small>参考圖</small>	九二女讀書
人体割合	○二編坤	十抱子剥果
衣服	應用推理佛像	十前題再試
象牙	顏面手足全体	十一美人贈花 <small>右說明</small>
題意	十姊妹待賓 <small>截碎十着 面貌八圖</small>	○終目錄終
工場	土稚兒慕乳	

象牙彫刻法乾

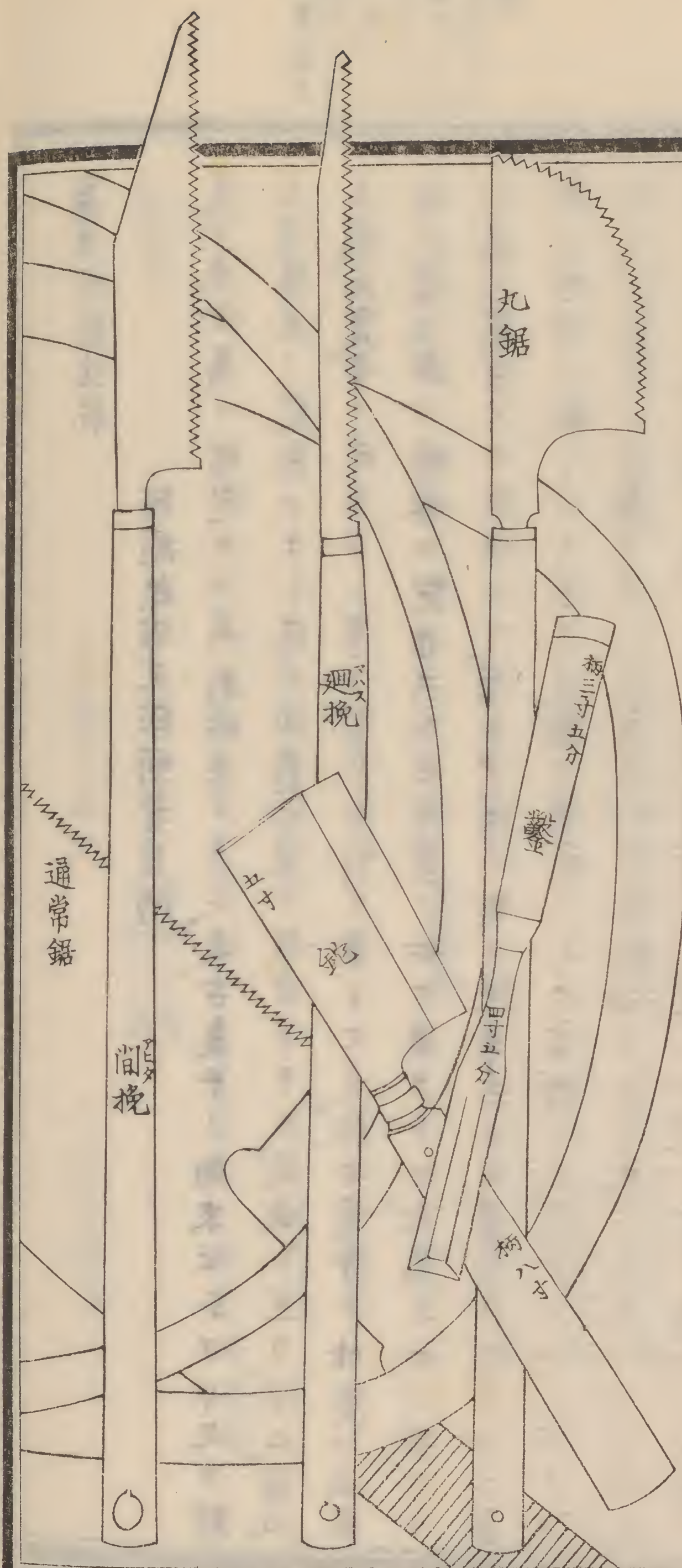
彫刻起因及彫刻者目的

夫レ本金屬ノ彫刻タル其創始甚々古シ、近古象牙ノ舶來セシヨリ之ヲ刻シテ器具ノ裝飾トナシ或ハ印籠烟袋ノ根付トナス、近世ニ至リ彫山、岡山、友親、法實等ノ徒出テ、專ラ象牙彫刻ヲ業トセリ、抑モ象牙ノ性質ハ本金屬ノ間ニ在テ精密ニ製作スルモ本質ノ如ク脆カラス、金屬ノ如ク堅カラズ、是レ貴重スル所以ナリ、而シテ此ノ術ニ從事スルニ營利ヲ主トシテ伎倆ノ如何ヲ觀ミサル者アリ、倘シ營利ノミヲ目的トシ、汲々トシテ刀ヲ把ラハ、其技或ハ老熟ニ至ルト虫尸、到底其鄙俗ナルヲ免レス、之ニ反シテ技術ヲ精研シ、名譽ヲ墜サ、ラン、一ヲ務メハ、或ハ一時ノ利ヲ攫取スル能ハスト虫尸、他日必ス高妙ノ域ニ到ラサルヲ莫ルヘシ、白樂天ノ詩ニ云ク、人各有偏好、物能莫兩全、ト豈贏利ヲ愛セサランヤ、品位ヲ尚フノ樂キニ如カス、學者必ス目前ノ贏利ニ迷フヲナク、能ク其本末ヲ辨シテ意匠ヲ定メ、一鑿一刀ヲ施シテ苟モセスンハ、蝶蛾ノ窩ヲ脱スルカ如ク、粗穢ノ体ヲ變シテ、其觀ヲ美ニシ、其術隨テ進達スルヲ蓋シ疑ヲ容レサルナリ、

彫山有盧生
夢園周山有
列仙龍神等
國友觀有孔
聖觀敬聖國
法實有災哭
怒園

アヲ オトシ
鹿落道具鋸諸類

凡テ彫刻ノ鹿落シハ鋸又ハ鑿鉋等ヲ用ユル者ナリ、諸其象牙挽ノ鋸ハソ
ノ目ノ形三角ニシテ、即チ之ヲ劍目ト称ヘ、総テノ堅質物体ヲ挽割ルニ用
ヒ、倘シ一邊平ニシテ一邊斜ナル片ハ、挽障リ鈍ク、及テ切斷スルヲ遲ス、左
ニ図シタル鋸ハ、双形ノ両様ヲ示セル者ナレハ、實際彫刻スヘキ物体ニ臨
テ、ソノ銳利遲鈍ヲ試ムヘシ、



釣掛平挽

棟除
柄四寸

釣掛廻挽

柄六寸

柄六寸

乾

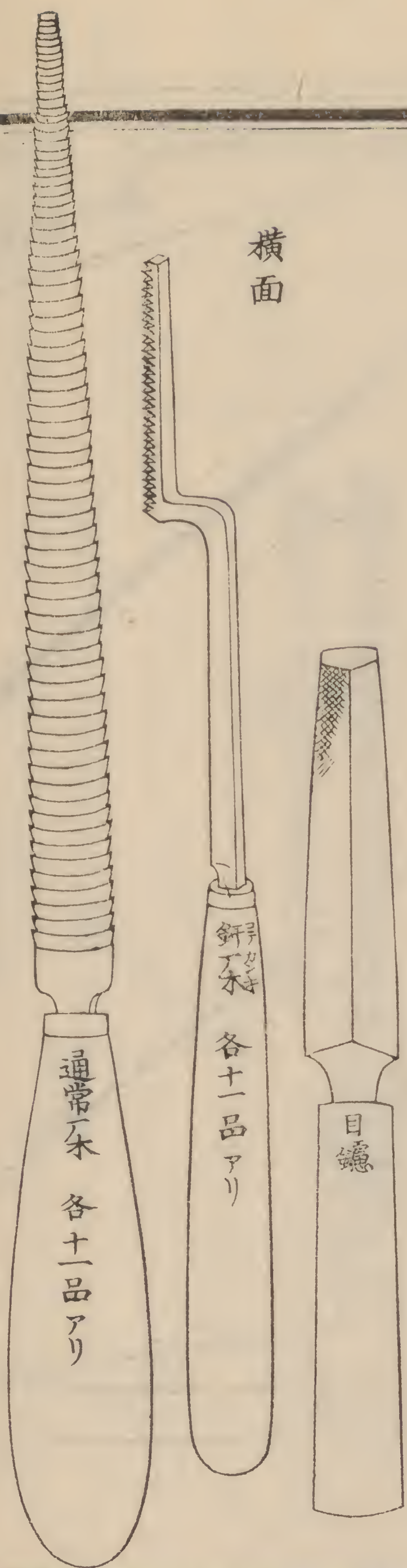
形十一 并鑿水

丁水鑿ハ畧ソノ用ヲ同フシテ金屬物ニハ專ラ鑿ヲ用ユ牙角物ニハ丁水ヲ專ラ用ユル者ナレ正或ハ牙角ノ仕上等ニ鑿ヲ用ユルアリ菱形ノ鑿ハ唯鋸目ヲ截ルニ用ユルヲ以テ之レヲ目鑿ト稱ヘ兩様共ニ大小ハ適意ニ考フヘシ大抵殊ノ十一形ヲ以テ要用ヲ便セリ

截面

- 桃形
- △月形
- 圓形
- ◇菱形
- 角
- △三角
- ▽截込
- △袴
- 平
- ▽鱗
- 棗

横面



小刀ノ焼方

小刀ニ用ユル下鋼ハ間鋤ト稱ヘテ鑿ノ如キ者商家ニ於テ販賣セリ近世舶来鉄渡テ其類數種ニ分レリ精密ニ鍛鍊セスヲ第一号鋼トス鑿等ニ宜ク次ハ第二号鋼トテ金石等ニ適ス其次ハ第三号鋼ニシテ牙角木竹及广木等ニ用ユルニ宜シ又其次ハ第四号鋼トテ機械的ノ應用ヲナシ而シテ此ノ小刀ヲ焼クヤ消炭ノ火中ニ容レ火色ト同キヲ度トシテ調合水ニ投ス若シ火色ヲ過キテ白色トナル片ハ炭酸質ヲ失ヒ忽チ脆性トナレリ故ニ克ク心ヲ用ヒ水中ニ在テ緑タル小刀ヲ出シ再ヒ火上ニ置キ金屬ハ琥珀色トス木竹牙角ハ琥珀色ヲ變シテ碧色ニ至ラサルヲ妙トス或ハ之レヲ燒ク人ニ依テ種々ソノ方法ヲ異ニス先ツ火中ヨリ出シヤ否油ニ容ルハアリ又湯ニ入レ或ハ味噌ニ指込ムアリ如斯簡單ナル方法ヲ心得テ以テ實際ニ試ム片ハソノ味ノ妙ナルハ自ラ擇フヲ得ルニ至ルヘシ

木竹小刀十三形併手付

木竹彫ノ小刀ハ尤モ鋸ク礪キ截味ヲ試ミ後本物ニ臨マサレハ形ヲ彫出ス自由ナラス形ヲ彫出ス自由ナラサレハ刀痕自ラ鋸ク人ノ鋸ク工

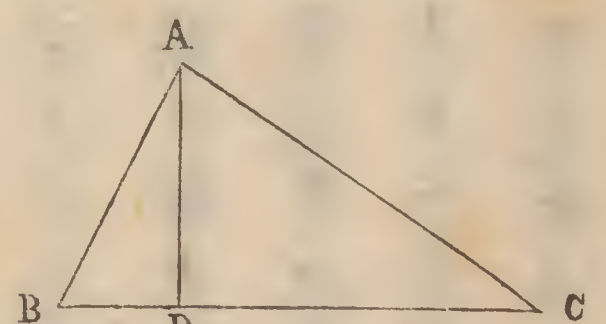
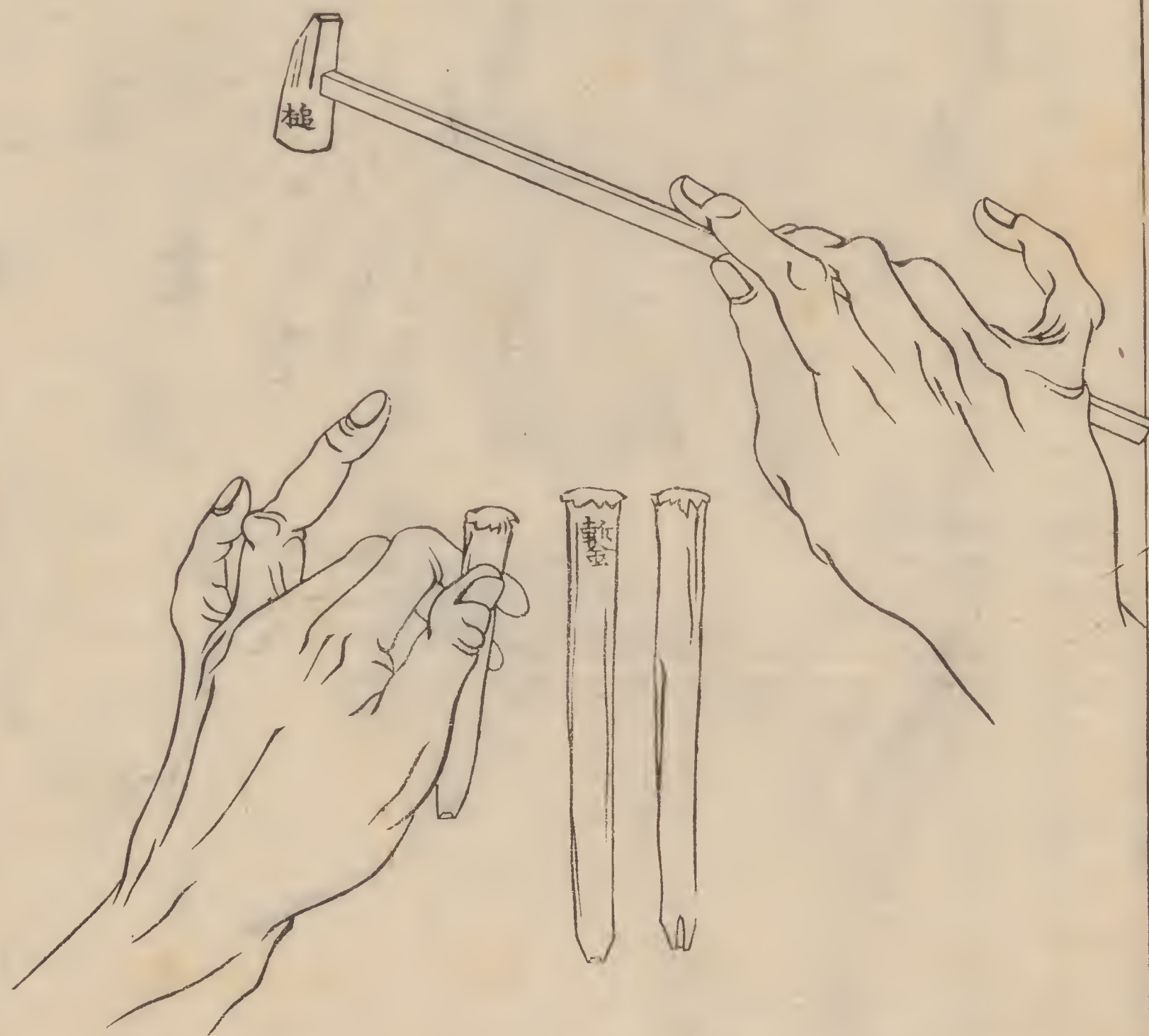
玉裏曰夫賢者國家之器用也所任賢則趨舍省而功施普君用利則用力少而成就衆故工入之用鈍器也勞筋苦骨終日之巧治將至巧治清干將之巧治清水淬其鋒越斂其鋒水犀草忽若記繩公輸若墨繩公輸若墨錐崇臺五層延袤百丈而相得也

金属刀併手付

金属ヲ彫刻スルハ他ノ木竹
 牙角ヲ彫刻スルト其仕方大
 ニ異リテ鑿ヲ使フ者ナレハ
 趙ヲ以テ叩カサレハ刀痕ヲ
 見セシムルヲ能ハス故ニ図
 ノ如ク鑿ノ形ト手付ヲ見テ
 其理ヲ考フヘシ又ハ皆木竹
 牙角用ユル所ノ又ニ稍急
 又ナルノミ其種類ハ甚タ多
 クシテ三十五六品モアリ彼
 是大小三百本餘ヲ用ユ

比例線解

此ノ図ハABCナル不等辺三角形ナリA点ヨリD点ニ垂線ヲ下シテC
 D線ハ法ト名ケDB線ハ適用スヘキ物体ノ尺度トスル也故ニ今二寸ノ



牙角ヲ碎ヒテ人跡ヲ造ルニ當テヤ人間普通ノ身
 ノ丈ケハ五尺三寸ト定メ而シテ腕ノ長ハ二尺五
 寸トカ又顔ノ長ハ七寸トカノ連合ヒヲ以テ二寸
 ノ牙角ニ當嵌ント欲スルモ物理上出来得ヘキニ
 非ラサレハ一層之レヲ縮メテ人跡ヲ

五寸三分ニ腕ヲ二寸五分ニ顔ヲ七分トス而モ
 尚未タ二寸ノ材料ニ之レヲ適用スルヲ得サル
 カ為メ是ニ於テ比例式ヲ以テ

$$(53:25) = (20:2) = 94\frac{18}{83} \text{ 又ハ}$$

$$(53:25) = (20:2) = 26\frac{22}{83} \text{ トナ}$$

二寸五分

シカ如キノ勞ヲ執ラサルヘカラス
 夫レ如斯事ノ物ヲ彫刻スルニ從テ
 筆算ヲ弄スルニ於テハ煩雜宛マリ
 キ故ニ之レカ繁文ヲ
 省略セントスル所ハ

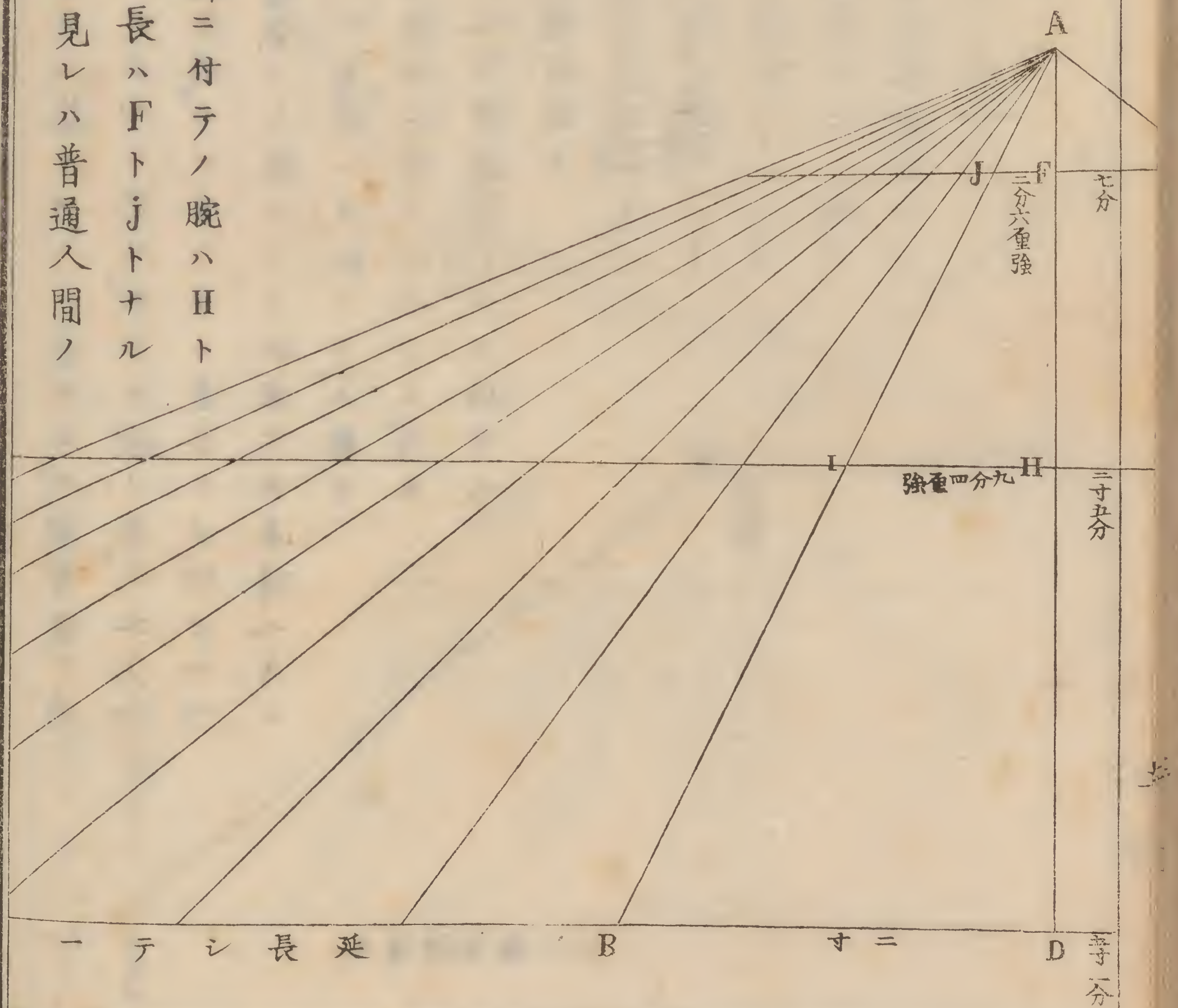
五寸三分

三浦清俊傳タリ

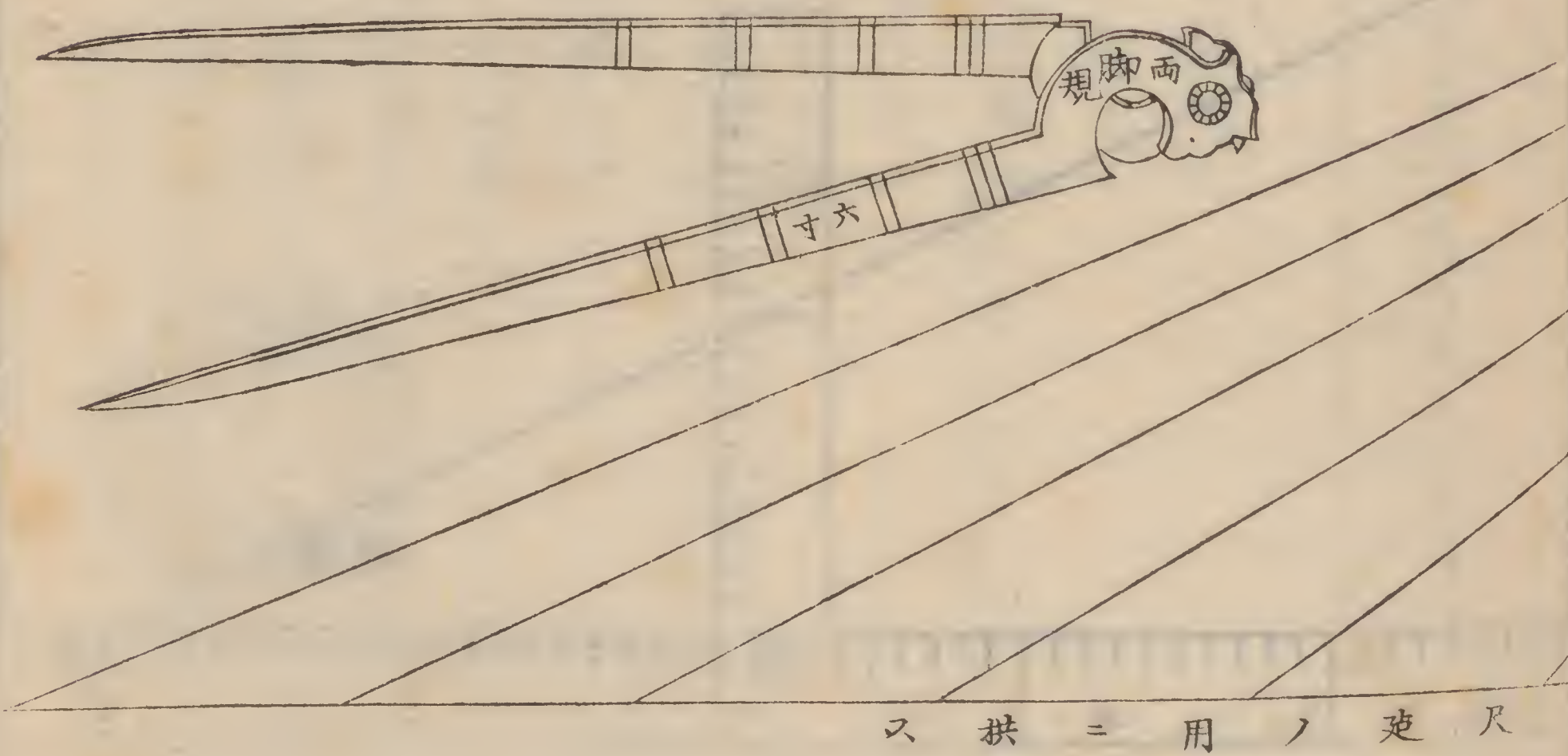
七分

五 乾

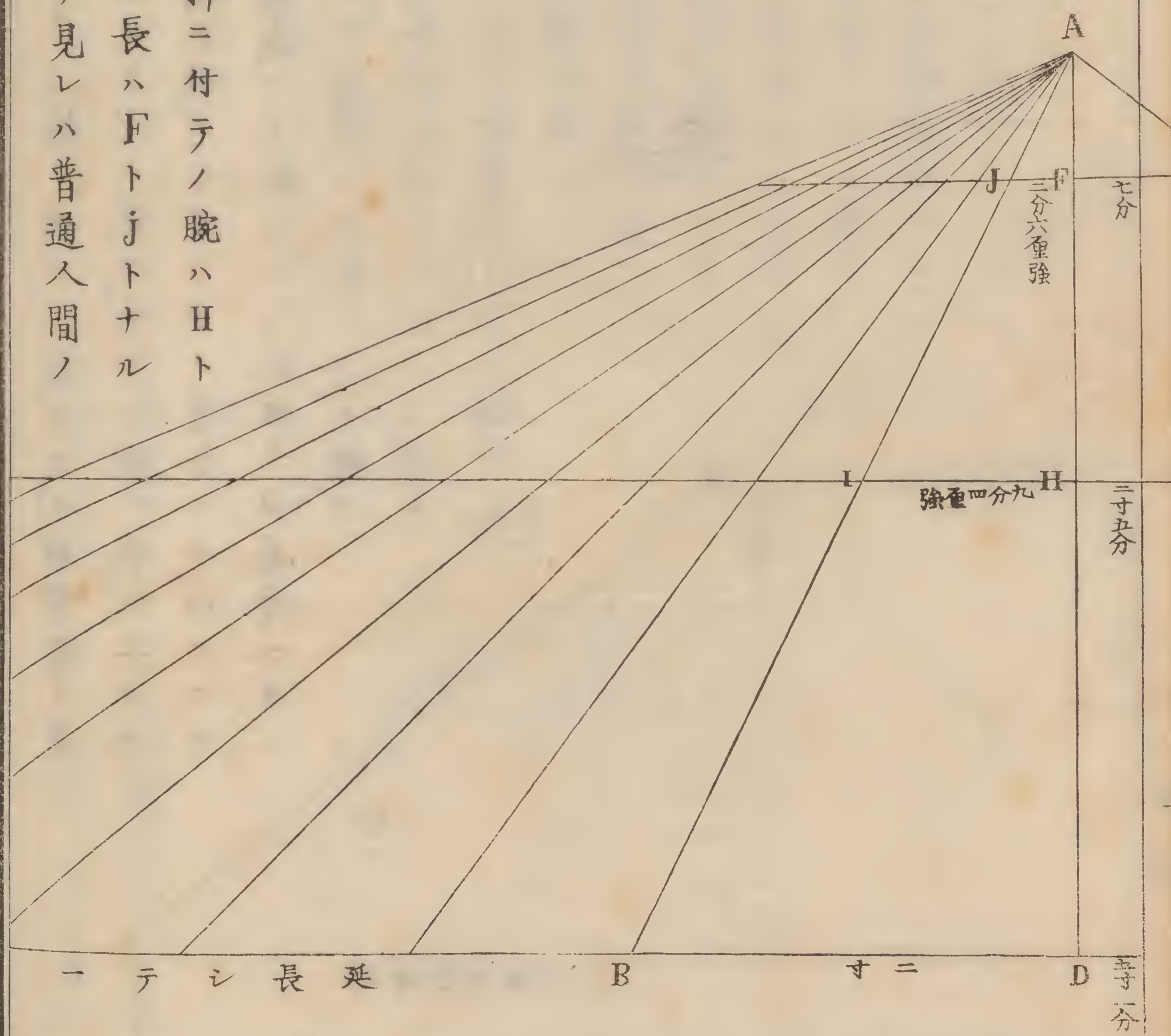
図ノ如クスヘシ
 今D C線ノ間則
 子五寸三分ナル
 人躰ノ縮寸ナル
 ヲ定メ置キ、尚延
 長シテB点ニ至
 リA点ヨリB点
 ニ邊線ヲ畫キ、又
 G H線及ヒE F
 線ヲ延長シテI
 Jトナシ、D Bノ
 間ヲ即チ二寸ト
 スルキハ、二寸ノ材料ニ付テノ腕ハHト
 Iトニナルヘク、顔ノ長ハFトJトナル
 ヘシ、是ヲ以テ之レヲ見レハ普通人間ノ



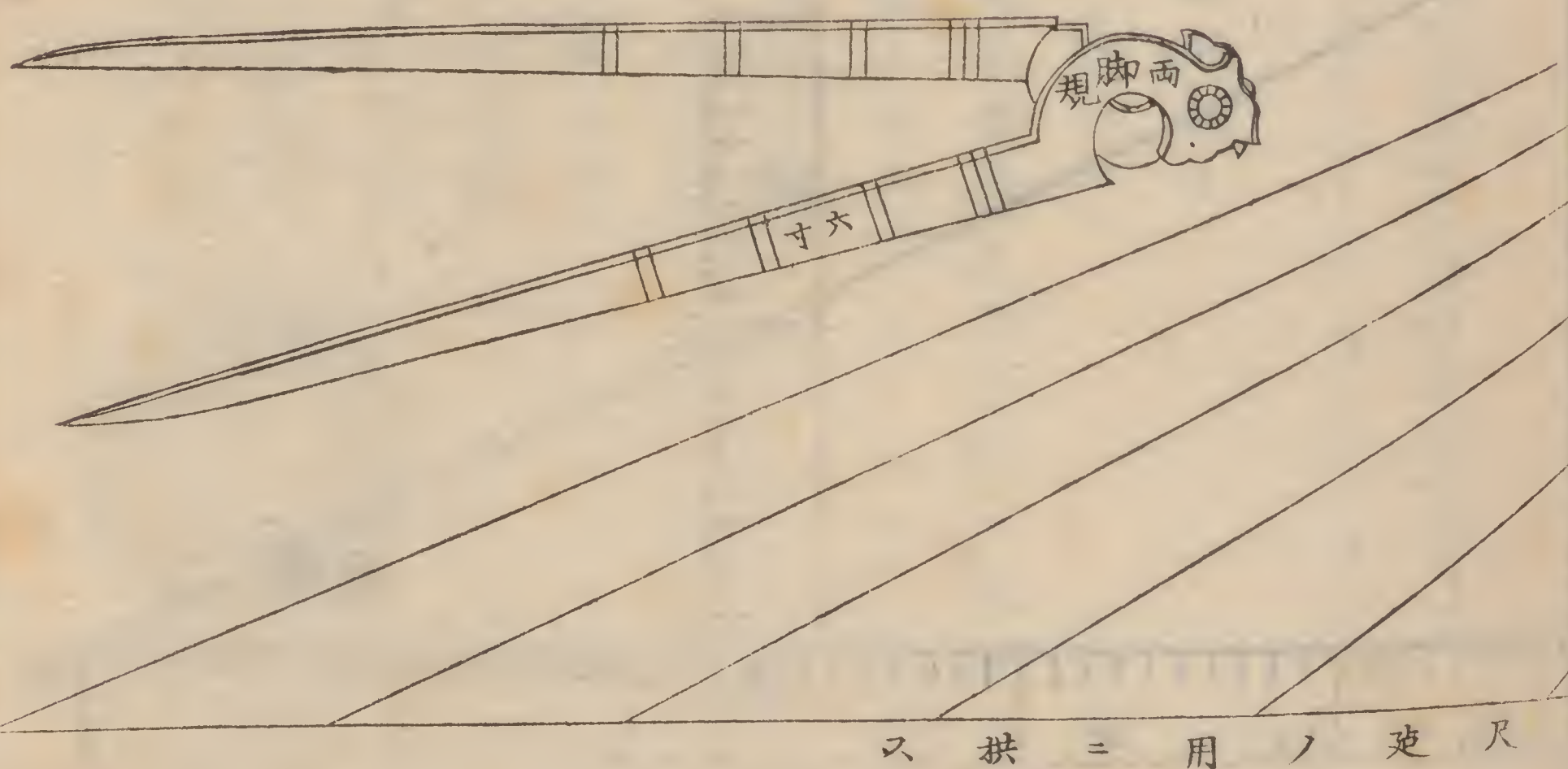
丈及手足等ノ寸法ヲ解スレハ、其彫刻ス
 ヘキ牙角ノ長短ヲ問ハス、手足顔貌等調
 度割合宜クスルヲ得ルナリ、只其O D線
 及ヒD B線ノ長短ニ從ヒ、則チ延長ノ如
 何ニ依テ顔及ヒ手足等ヲ比例シ得ヘキ
 ナリ、例ヲ攀クレハ三尺ノ鶴ヲ六尺ノ材
 料ニ彫刻スルニ於テモ同シ理ニテ出来
 シ得ヘキ也、故ニ既ニ明カナリ居リタル
 尺度ヲ兩脚規^{コンパス}ヲ以テ之レヲ定メ置キ、今
 新ニ求メント欲スル向キニ轉ジ、其比例
 ヲ以テ彫刻セハ、技藝ノ工拙ハ其人ニア
 リト、魚躰ハ小格ニシテ頸太ク、又顔小サ
 ク腕肥太ニ、或ハ足長クシテ躰格ノ瘦細
 ナルカ如ク、餘リ見苦敷繪画彫刻物ノ改
 良ヲ裨補スルニ庶幾ラレ歟、



図ノ如クスヘシ
 今DC線ノ間則
 子五寸三分ナル
 人躰ノ縮寸ナル
 ヲ定メ置キ尚延
 長シテB点ニ至
 リA点ヨリB点
 ニ邊線ヲ畫キ又
 GH線及ヒEF
 線ヲ延長シテI
 JトナシDBノ
 間ヲ即チ二寸ト
 スルキハ二寸ノ材料ニ付テノ腕ハHト
 Iトニナルヘク顔ノ長ハFトJトナル
 ヘシ是ヲ以テ之レヲ見レハ普通人間ノ



丈及手足等ノ寸法ヲ解スレハ其彫刻ス
 ヘキ牙角ノ長短ヲ問ハス手足顔貌等調
 度割合宜クスルヲ得ルナリ只其OD線
 及ヒDB線ノ長短ニ從ヒ則チ延長ノ如
 何ニ依テ顔及ヒ手足等ヲ比例シ得ヘキ
 ナリ例ヲ舉クレハ三尺ノ鶴ヲ六尺ノ材
 料ニ彫刻スルニ於テモ同シ理ニテ出来
 シ得ヘキ也故ニ既ニ明カナリ居リタル
 尺度ヲ兩脚規^{コムパス}ヲ以テ之レヲ定メ置キ今
 新ニ求メント欲スル向キニ轉ジ其比例
 ヲ以テ彫刻セハ技藝ノ工拙ハ其人ニア
 リト虫躰ハ小格ニシテ頸太ク又顔小サ
 ク腕肥太ニ或ハ足長クシテ躰格ノ瘦細
 ナルカ如ク餘リ見苦敷繪画彫刻物ノ故
 良ヲ裨補スルニ庶幾ラレ歟、



比例尺解

先ツ圖ノ如ク尺度ヲ作り、A点ニ綵線ヲ付ス、既ニ解説セシカ如ク人間ヲ五尺三寸ト定ムル片ハ、C点ニアル尺ヲ五寸三分ノ處ニ据置キ、又材料ヲ二寸ト定ムル片ハB点ニアル尺ヲ二寸ノ處ニ据置キ、而シテ

此ノ人
軀ニ對

シテ求ムル所ノ腕ノ長サニ寸五分トセハ、則チA点ニアル綵線ヲ二寸五分ノ處ニ張ルヘシ、然ル片ハ其二寸ノ材料ニ對シテハ、B点ノ尺度ニ九分四厘幾等ト云距離ヲ見ルヘシ、即チ之レヲ兩脚規ニ度リ采ツテ直ニ現品ノ材料ニ轉遷セハ前



尺ノ人
伊 沢

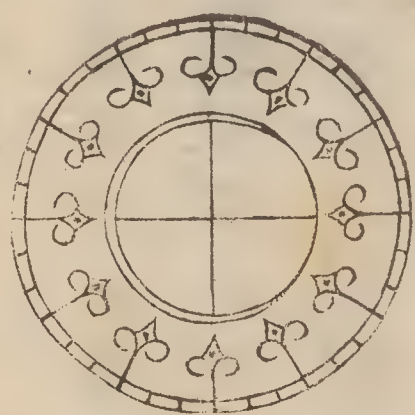
ノ比例

線ト同

クツノ



用ヲ達スルニ便ナルヘシ故ニ克ク此ノ比例尺ヲ精密ニ制作シテEDニ本ノ支尺ヲ左右ニ動カスヲ得セシメハ材料ノ大小長短ニ拘ラス自在ニ用ヲ達セシムヘシ亦新ニ二寸ノ材料ヲ變シテ四寸ノ亀ノ甲ヲ八寸ノ大ヒサニ作ラントスルニ當ツテモ同シ理屈ニテC点ニ接スル尺ヲソノ八寸ノ處ニ近シB点ニ接スル尺ヲ四寸ノ處ニ進メハ大小度ル所皆同クD点ニ向テ綵線ヲ張ルヘシ左レハEB尺ノ部内ヲ經過スル即チ亀ノ甲ノ巾三寸トスレハ其三寸ノ處ヲ見定メDC尺ノ部内ニ三寸ヲ倍捷シタル距離ヲ生スヘシ之レ即チ八寸ニ對シテノ寸法タルヲ知ルヘキナリ

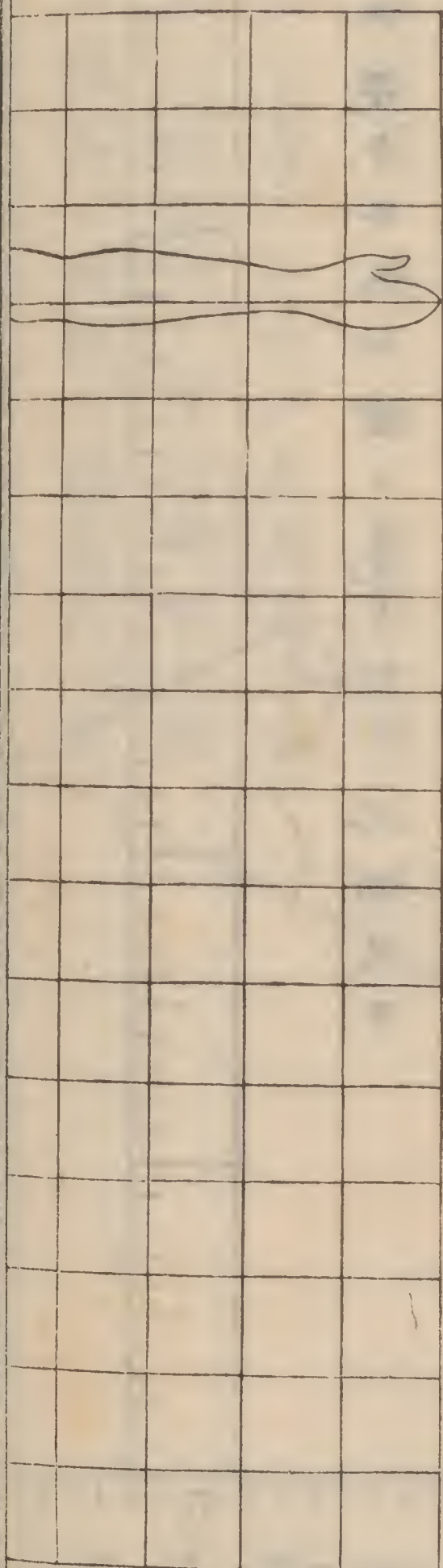


乾

明 玉 始

人躰ノ割合

人躰ノ割方ニ四種アリ、何レモ其物ニ依テ應用セシ者ナレハ皆左ノ図ヲ見テ悟ルヘシ。一ハ碁盤割トテ十六卦四面ノ図ヲ製シ、以テソノ中央ニ人躰ノ形ヲ画クハ、骨格ノ割合宜キヲ得ルナリ。二ニハ六割法トテ頭ノ頂上ヨリ足ノ指底迄ノ寸法ヲ六寸ト見積ルハ、之レヲ切半シテ三寸ノ処ハ、即チ耻骨部ト定メ是ヨリ上部ヲ三分ノ一部即チ一寸ヲ顔及頸トス、餘ノ二部ナルニ寸ヲ胸腹ニ充テヘシ、肩ノ廣サハ顔頸ヲ以テ準トセハ、則チ一寸ニシテ中心ヨリ左右ニ五分宛ヲ出タスヘシ、臂ト腕トハ一寸毎ニ屈接シテ五分ハ又タ手トナル、而シテ之レヲ左右ニ伸張スルハ、両手ノ指先ヨリ六寸トナル、是レ亦タ碁盤割ト同シ、理屈ニシテ只卦ヲ引クノ勞ヲ省クノミ、但皮肉ノ輪廓ヲ



画クハ

耻骨ノ下

端ニ二分

計ノ優餘

ヲ置クヘ

シ是レ所

謂坐点ト

モ名クヘ

キ哉下部

ハ即チ耻

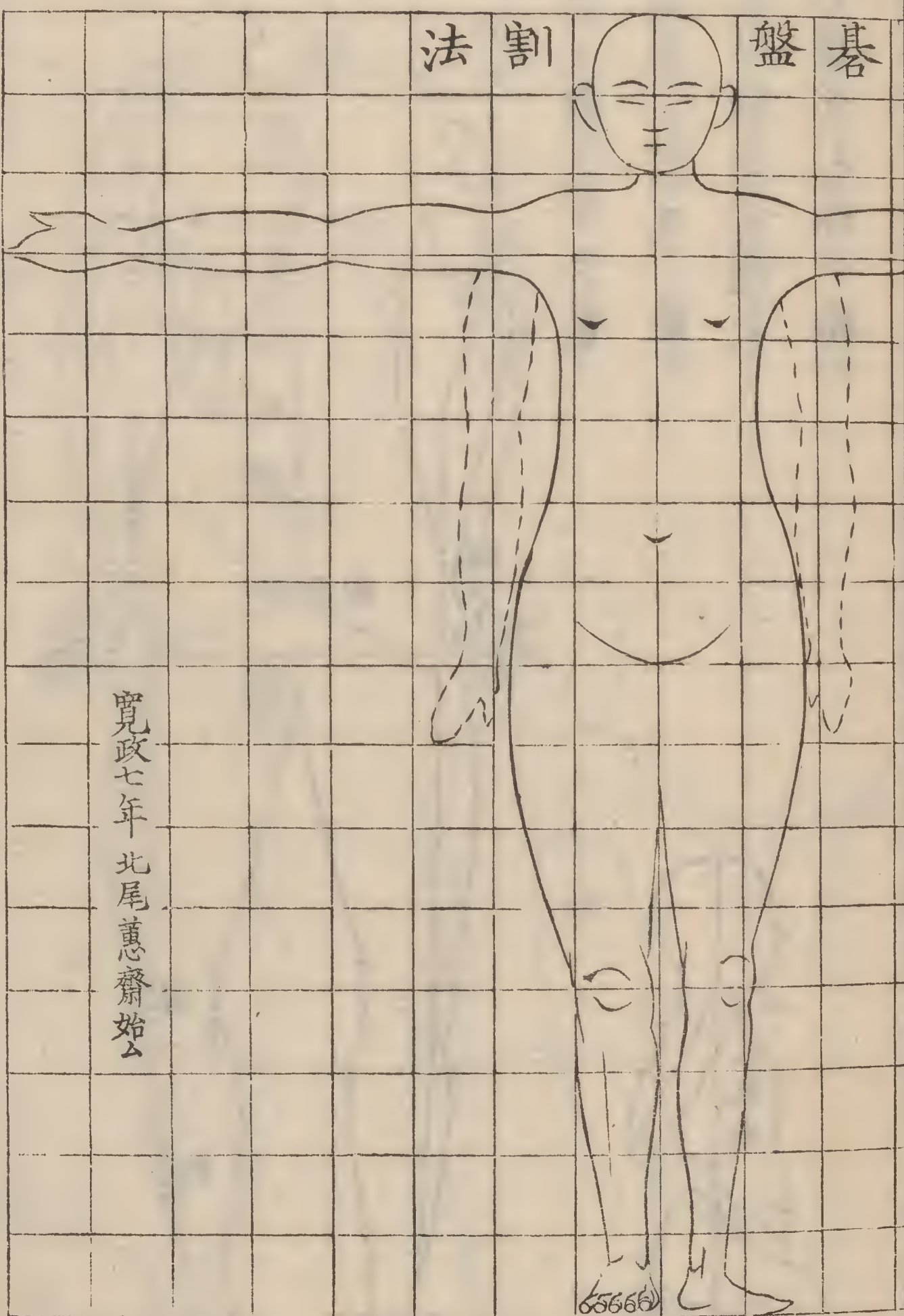
骨ヨリ足

迄ヲ切半シタル一寸五分ノ処ヲ膝トセハ、割合甚タ全フスヘシ。三ニハ五

割法トテ兒童ノ割方ナリ凡テ小児ハ徒然見ルハ頭部甚タ大ナリ、是レ身

体ノ生育ハ支体ニ長スル者矣小児ヲ寫スハ此ノ割方ニ基ケハ、ソノ連合

ヲ失ハス、諸ソノ割方ハ頭ノ頂上ヨリ足ノ指底迄ヲ五分シテ、ソノ一部ヲ

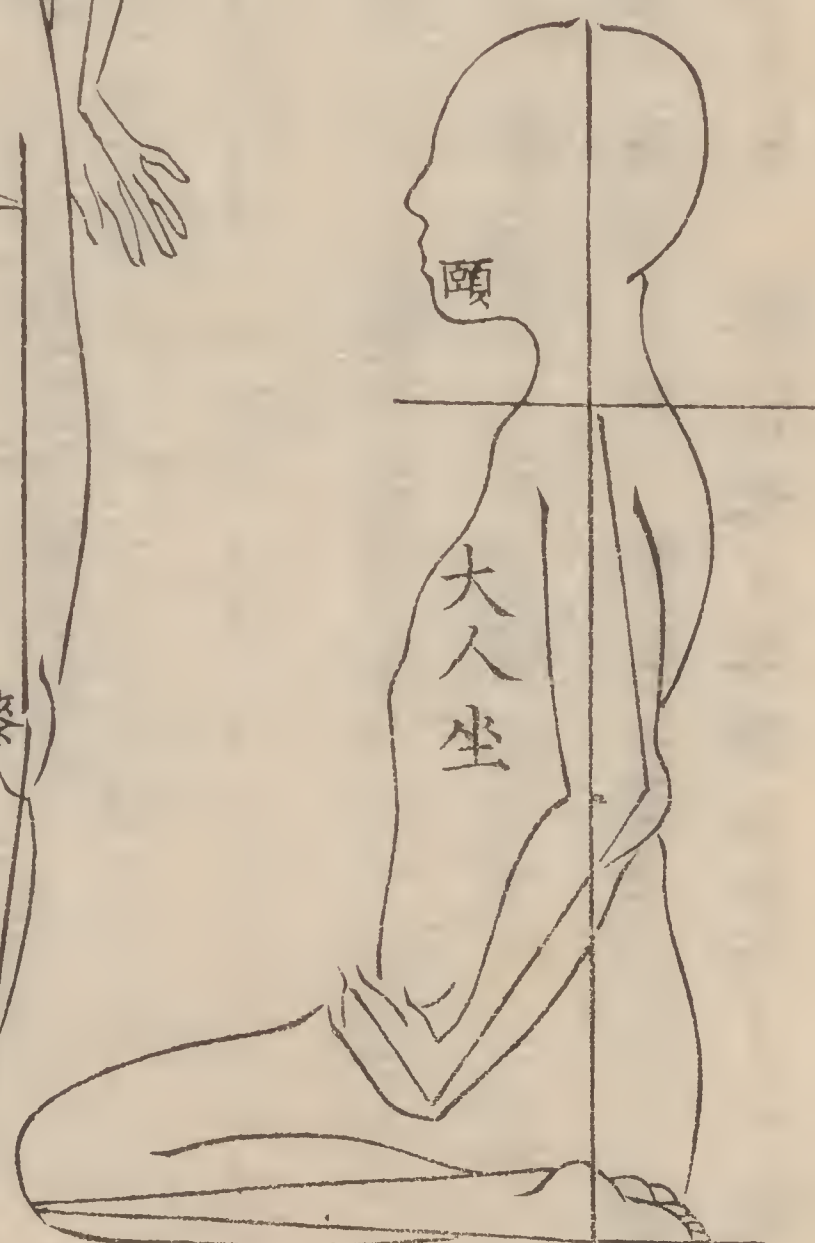
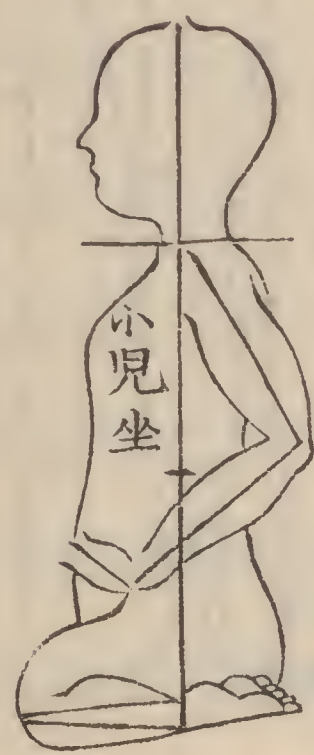


寛政七年北尾蕙齋始

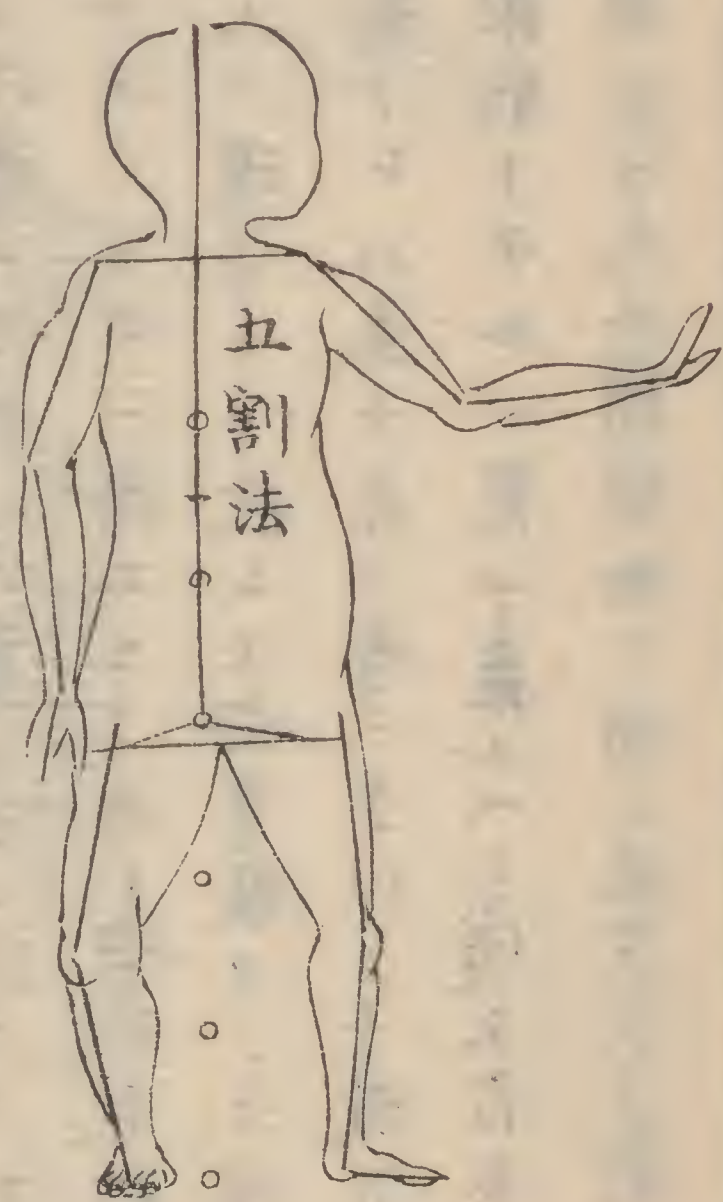
顔頸トスヘシ肩中ハ顔頸ヨリ
少ク縮ムノミ其餘ノ割方皆大
人ノ六割法ト同シケレハ図ヲ
看テ悟ルヘシ四ニハ二節割ト
テ六割法ノ一部ヲ唯ニ節トセ
シ者

ナレ
ハ全
体ニ
差違
一ナ

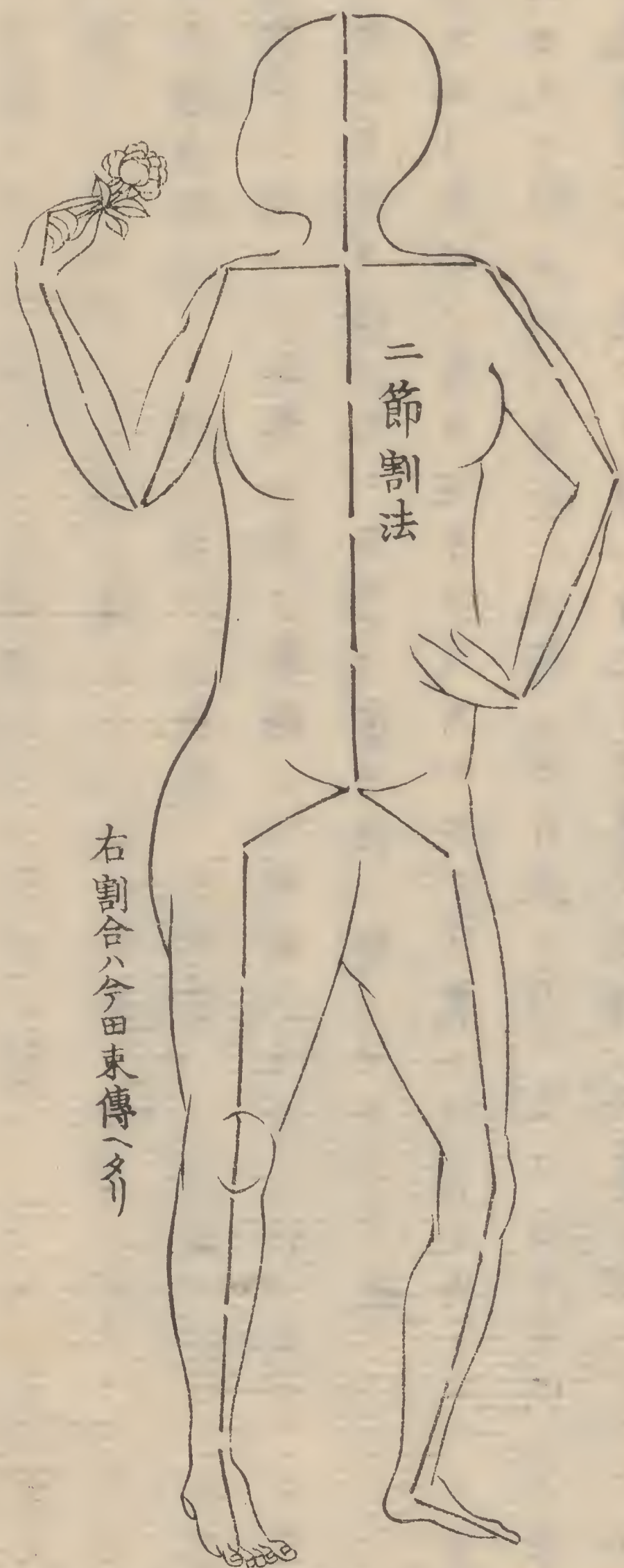
ク皆前ノ割方ト同フシテ姿
貌ノ偏曲ヲ自在ニ寫スノ便
アリ克ク是レニ依テ皮肉ノ
輪廓ヲ画ケハ自ラ人体ノ格



ヲ悟ル其掌ノ大ハ半面ヲ掩
フヘク足ノ長ハ手ノ半分ヲ
過ク身ノ長短ハ面ヲ以テ準
トナシ立像ハ七坐像ハ三半
ヲ則トス亦面法ニ由申甲田



同王
圓目
用風
之レ
ヲ十
字面
法ト
謂フ



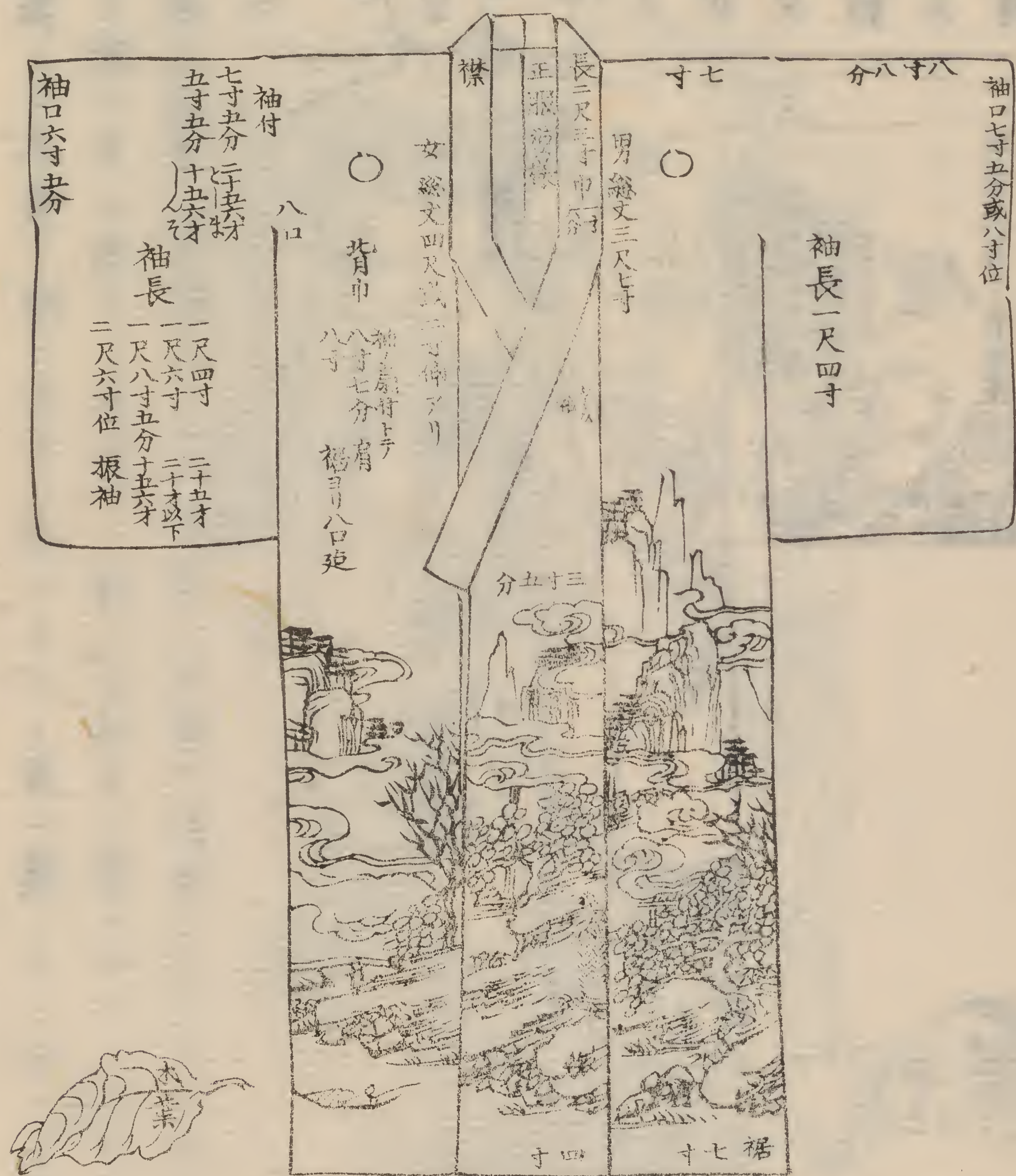
右割合ハ今田東傳ヘリ

學者以ノ道ヲ知テ繪画彫刻ヲ學ヘ
ハ千變万化須クソノ自在ヲ得ヘシ

衣服

人躰ノ割方ハ前圖ノ解釋ヲ以テ畧知ルヲ得ルモ之レニ如何ナルモノ
ヲ着ケテ装ヒヲナスヤ果シテ衣服ヲ以テ肉体ヲ翳スル者人ノ常ニ知ル
處ナリ然ルニ僅カクノ衣服ノ為メニ人体ノ外貌ニ變革ノ生スルヲ尤モ
多ク就中繪画彫刻ニハ極テ名ケテ衣紋ト云四季アリ模様ヲ殊ニス都鄙
アリ貴賤アリ皆以テ形容ヲ分ツ衣服ノ功用亦大ナリ人物ヲ描クヲ學
テ日々已レカ心ヲ修メ已レカ手ヲ磨キ攷ミ挽マサレハ自然ツノ手ニ光
輝ヲ發スルヲ自己ノ甚タ近キヨリスル處ナリ然ルヲ吾人共ニ之レヲ棄
テ、只々人ノ製圖或ハ筆痕ニ依頼シテ自治ノ力ニ乏ク古今大家カ名筆
良刻ヲ見テ是レニ迷フヲ多シ自己カ技藝ノ光輝ハ修業ノ餘ニアルヲ知
ラスシテ克ク人ノ筆痕ヲ模範トスルヲノミ之レ務ムルヲ勿レ噫終身師
ニ學テ師ニ如カサルハ是レ則チ古人ノ遺言ナリ然レモ尚筆痕ヲノミ模
擬スルノ道ニ趣キトハ人情ノ通弊ナレハ克ク自ラ考ヘテ以テ千遍万
習ノ餘ハ雛形漸ク進ンテ画トナリ彫刻トナルノ意ヲ慮ルヘシ借上古未
タ人間タルノ名ヲ知ラサル以前ハ果シテ人ハ諸動物ノ間ニ混交シテ裸

蟲ノ部内タルヲ疑ヒナシ然ルニ人事関ケテ禽獸ト全クソノ智恵ヲ異ニ
スルヲヲ悟
リタル以上
ハ自ラ人間
タルノ分定
マリ各義務
ヲ帶フルノ
世界トナル
茲ニ於テカ
始メテ貴賤
上下ヲ示ス
ニ衣服ニア
ラサレハ其
躰ヲ別ツコ
能ハス又寒



身章撮要云
衣服之章
也古者未
絲麻而衣
衣鳥獸之
皮爰自義
而降衣之
制興聖人
物取義乾
莫不有制
寓乎其間
者或曰周
故施袍

熱ヲ防クヲ能ハス木葉ヲ綴リ羽毛ヲ編シテソノ身ニ纏フハ則チ衣服
ノ始メニシテ漸ク年ヲ歴月ヲ重ヌルニ隨ヒ思情日ニ濃カニシテ寒熱ノ
加減ヲ慮リ禮式通常ノ裝飾及ヒソノ模様ノ分別ヲ創造シテ以テ衣服ヲ
着クルニ至ル
而シ
テソ
ノ服
制タルヤ古今
殊ナリト魚先
ツ此ノ図ハ當
世通常服ヲ身
ニ纏フノ容貌
ヲ示シテ褌ノ
生スル形ヲ得
聊衣紋ノ心得



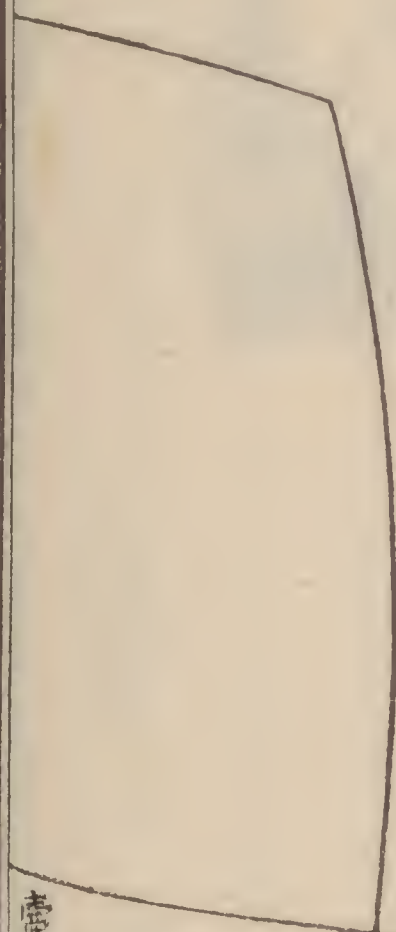
描法十八則
高古遊絲描
琴絲紋描鐵
線描行雲流
水描馬蝗描
葉描釘頭鼠
尾描柳葉描
曹衣描蛇蚶
描頭釘頭描
混描竹葉描
折芦描寒枝
橫撇橫橫戰
筆水紋描枯
柴描減筆描

ヲ傳フルノミ
是レヲ心得テ
後運筆ノ發達
運刀ノ截味各
其心意ニ任セ
修業
ノ成
功ヲ
待テ以テ
世ニ顯セ
ハ當ラス
ト魚遠ラサル
ノ繪画或ハ彫
刻品ヲ製作ス
ルコトヲ得ン



象牙

象牙ノ全軀ハ圓ノ如キ者ニシテ是レニ大小アリ
其大ナル者ハ長九尺輪切ニシテ無垢ナル処直經
七寸餘アリ其重量ハ凡ソ十八貫目ヲ呈ス小ナル
者ハ呖レヲ牛房水地ト称ヘ長二尺ニシテ輪切ノ
直經一寸八分重量凡ソ五六百目アリ呖ノ質タル
ヤ水色ヲ含テ点目細密ニ味アル水地多クハ安南
水地ト称ヘテ其價貴ク点目粗麁ニシテ輒モスレ
ハ割レノ生スルヲ印度水地ト称スルカ印度水地
ハ磨ク時モ稍勞力ヲ加ヘサレハ光澤生セスシテ
着色ノ時ニ當テハ班点ノ生スルヲ免レス而シテ
亦此ノ一般磨クヘキ事
実ハ実業者ノ克ク知ル
処ニシテ別ケテ述ル
ヲ欲セサレ氏只素人ノ



上等筆立

筆立類ニ用ユ

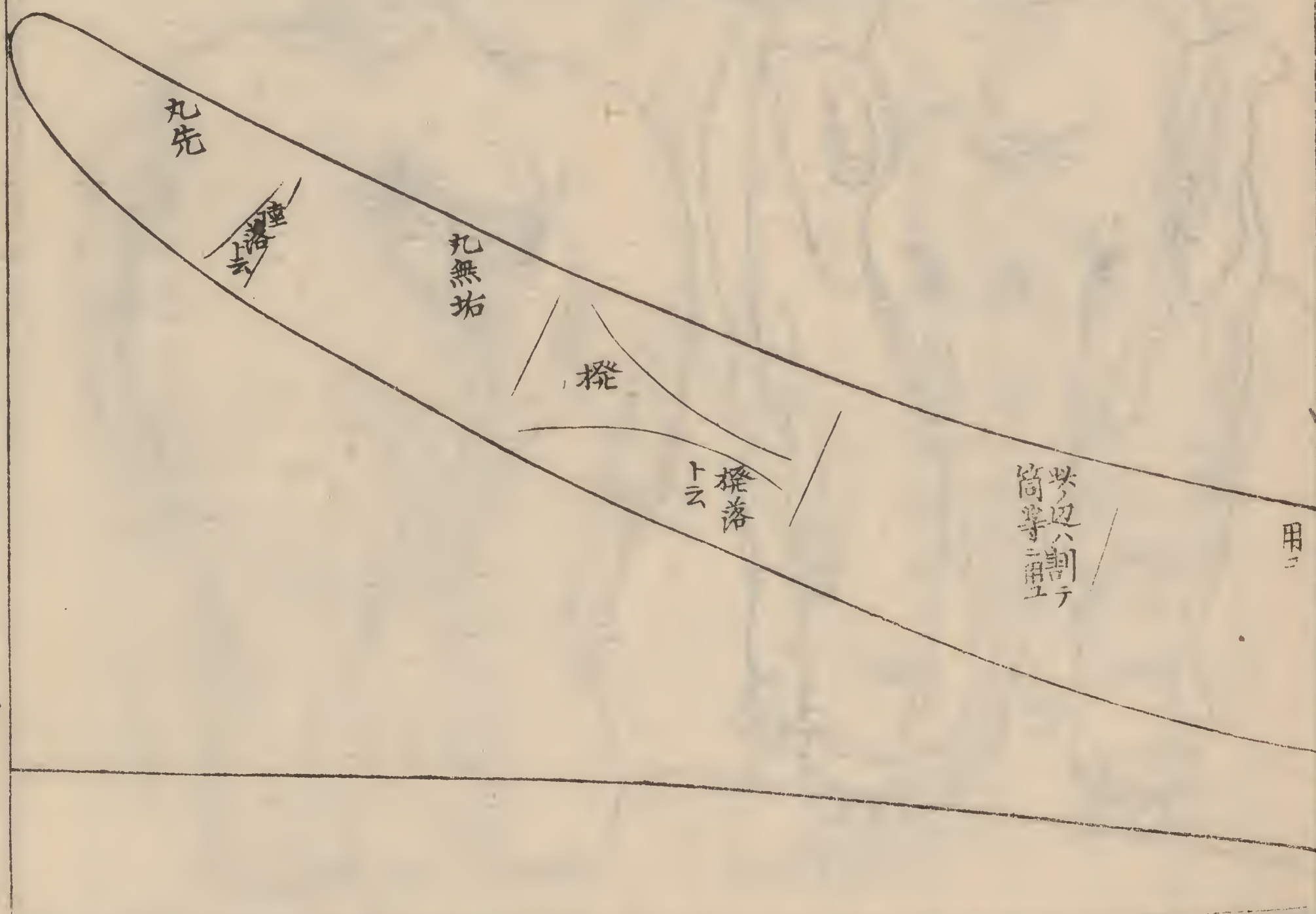
象牙全體縮圖



為メニ聊其仕方ヲ述ヘ

レ其磨クヘキ物品ハ木
賊棕葉磨砂角粉或ハ新
藁トス皆之レヲ水ニ浸
シテ其潤タル後幾偏ト
ナク他ヲ觀ニス腕ノ勞
疲ヲ恐レス一心ニ磨擦
セサレハ光澤ヲ生セシ
ムルヲ能ハス尚又精密
ナル彫刻物ノ間隙ヲ磨
ク片棕葉ヲ使フ自由
ナラス故ニ楊枝ニ精粹
ナル砂或ハ角粉ヲ付着
シ以テ磨擦セハ刀痕ヲ
失ハスシテ光澤ノ生ス

大丸先現品如圖重量一貫二百目代價凡四拾五圓



丸先

丸無垢

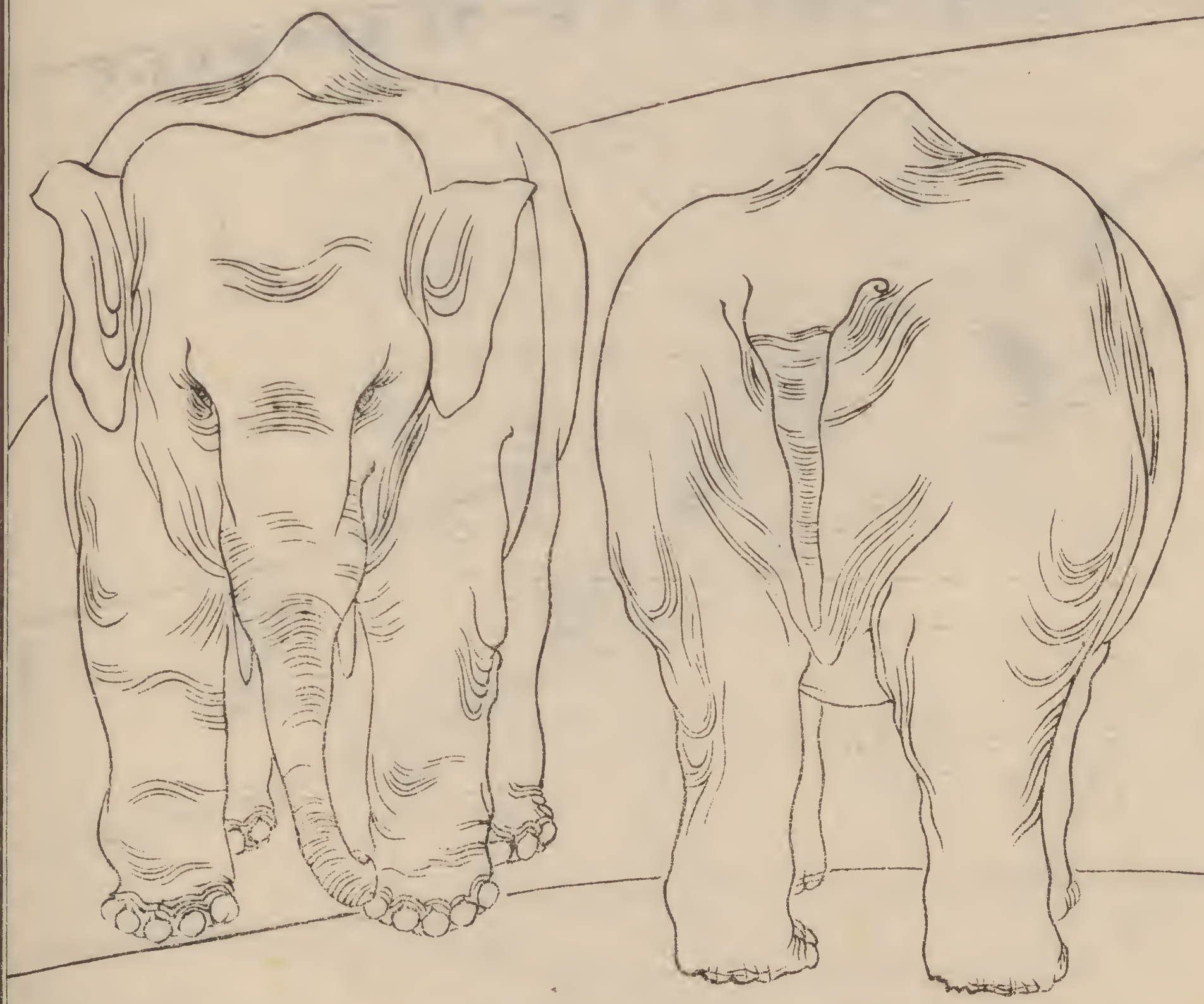
撥

撥落
ト云

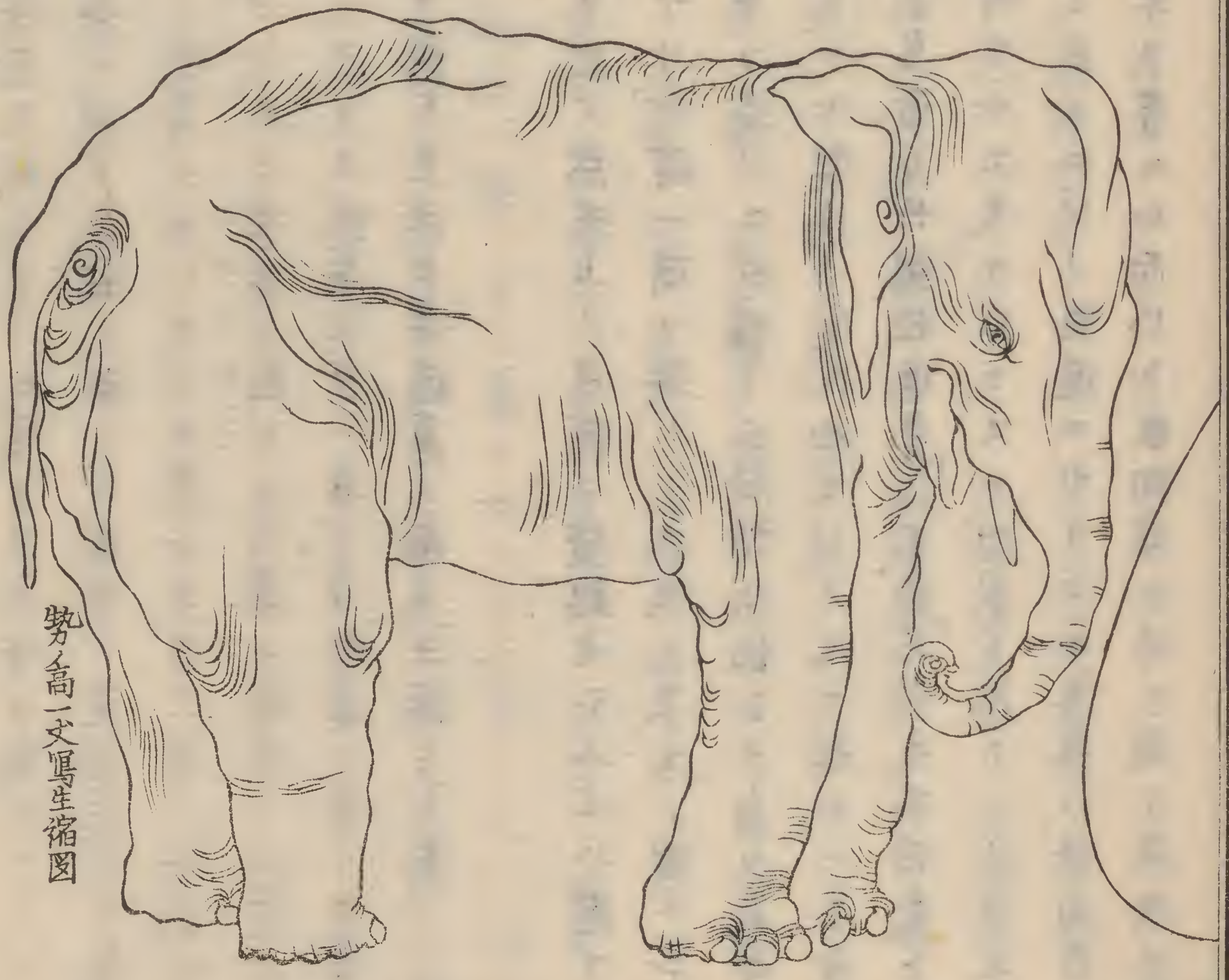
此辺ハ割テ
筒等ニ用ユ

用

ルアリ、而シテ堅實ノ象
 牙ハ、棕葉ヲ要スレ、木
 賊ヲ用サルヲ好シトス
 「古ヨリ象牙ヲ貴重スル
 ハ深ク其意ヲ傳ヘサレ
 氏、其象タルヤ千斤ノ重
 キヲ載セテ重シトセス
 馴レテ愛スヘキ也ノ工
 大獸自ラ他ノ走獸ト異
 ナリ、克ク語音ヲ弁ス、壽
 亦長シテ命數ヲ知ル人
 稀ナリ、兩長牙アリ、頭俯
 シ可ラス、頸回シ可ラス
 口、頤ヲ隱ス、地ヲ去ル
 速シ、運動鼻ヲ以テ用ヲ



ナシ一軀ノ力皆鼻ニア
 リ、將ニ行ントスル片先
 鼻ヲ地ニ柱シ以テ足ヲ
 移シ、殊ニ鼻孔深ク、開闢
 以テ物ヲ取ル、水ヲ飲ム
 ニモ鼻ヲ以テ吸テ之ヲ
 捲ク、足柱ノ如ク指ナク
 只爪甲アリ、前ハ五個、後
 ハ四個、形栗ノ如シ、幾歲
 ニシテ一度牙ヲ換ルヤ
 脱スル片深ク之ヲ藏
 ス、故ニ削木ヲ以テ之レ
 ニ代フル片ハ漸ニシテ
 得ヘシト、象牙ノ得難キ
 ハ金玉ト均スルモ宜ナ



勢高一丈寫生縮圖

子曰射有似
乎君子失諸
正鵠反求諸
其身

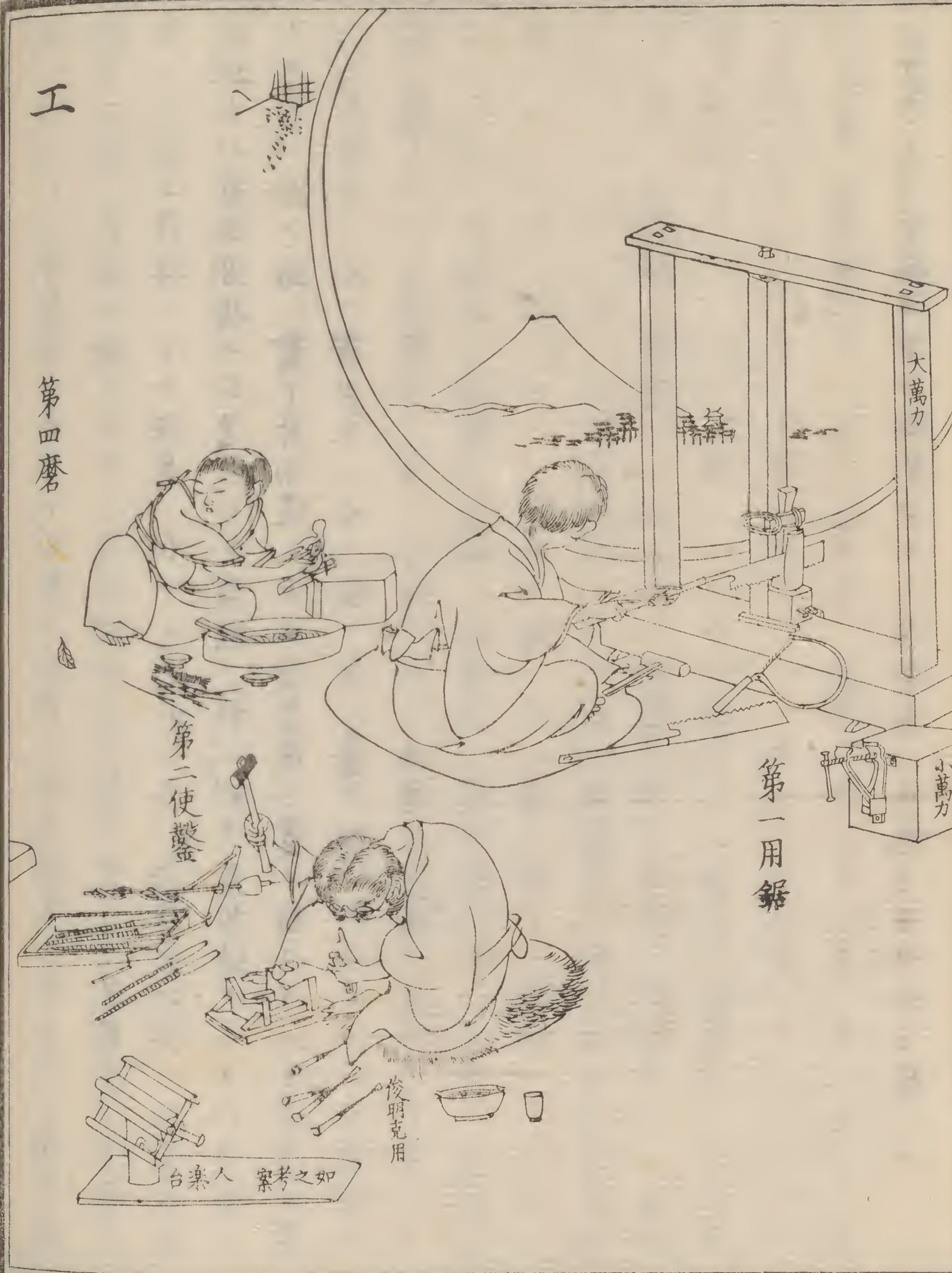
ル哉殊ニ彫刻家之レヲ得テ稍慮ヲ廻ラサ、ル可ラス心智ヲ施サ、ル可
ラス一個ノ片塊モ其人ノ智能ニ由テ奇觀ヲ顯ハス無用ノ牙塊、變シテ有
用ノ物体トナル豈ニ技術家ノ智慧ト云ハサルヲ得ンヤ、弓ヲ張テ鵠ヲ
得ント欲セハ先ツ其心ヲ正フス、且ツ其器ヲ利ストハ是レ如何ナル意ヲ
指トナルヤ深ク推察セサルヘカラス、從是以下ハ右ノ刀鋸等ヲ借テ其順
序ニ基キ実物實體ニ當リ、題ヲ設ケテ以テ其道具ノ働キヲ試ミレ矣、

題意

千百人目的ヲ同フシテ、進路ヲ定メ、無形上ノ思慮ヲ發起セシムルハ、題ヲ
以テ引誘セサルヲ得サル者ナリ、所謂一隅ヲ舉ケテ三隅ヲ及スノ理ニシ
テ各意匠ニ依リ、小心ト云一事ヲ遺サス、放膽ト云神情活動シテ、自ラ是等
ニ分別生シ、獨具目的ヲ同クスルモ製体ノ變化必スソノ人ニ起ルヘシ、今
吾儕リニ政和ノ世ニ生レ、徽宗皇帝カ竹鎖橋邊賣酒家、踏花歸去馬蹄香ト
歌ノ二題ヲ命セラルレハ、如何ナル工夫ヲ回ラスヤ、酒家ト花トニ注目ス
ルヲハ、吾人等ノ通例タルヘシ、然ルニソノ魁選ニ中リタル善画ハ、橋頭竹
外ニ於テ一酒帘ヲ掛ケテ酒字ヲ書スル而已ト、數蝴蝶ヲ掃テ飛テ馬後ヲ

逐フ而已トハ、皆意外ニ出テ、其意ヲ形容シ得テ尤モ妙ナルヘシ、凡テ、問
題上ニ向テ意味ヲ論スル片ハ、直接間接アリ、廐戸皇子、菅原道真ノ肖像ト
云ヘハ、即チ直接ニシテ、深意ノ在アルニ非ラス、一路清廉之図、一品當朝之
図、杯トハ、意味間接ニシテ、之レヲ隱題ト称ヘ、則チ音相通スルヲ以テ、描ク
ト多シ、一路ノ路ハ、鷺ト音相通シテ、水邊葦葭ニ鷺ヲ描クヲ以テ、其意ヲ表
ハス、亦濱邊ノ浪ノ擣テタル処ニ、鶴ノ居ル畫ヲ描クヲ、之レヲ一品當朝之
図ト、題スルナリ、是昔文一品ノ官位ノ服ノ衣紋ハ、仙鶴ノ補子ナリ、故ニ一
品ハ、一濱ニ音相通シ、當朝ハ、當潮ニ音相通シタル故ニ、文一品官ノ朝廷ニ
當スルト、云意ヲ祝シテ、一ノ濱邊ニ、鶴ノ居ル畫ヲ掛ケテ、文官ノ人ヲ請フ
ニ、用ユルナリト、堂上白頭、福祿壽、玉堂富貴、一笑、桃柳四燕、九皋鳴鶴、雞群鶴
立ノ類ハ、皆間接ノ隱題ナリ、亦山水ノ画題ハ、多ク直接ノ命題ナリト、魚、文
意ニ牽束セラレテ、文句ノ儘ノミニ、許リ描キテハ、繪画ノ趣向甚タ薄ク、且
ツ氣韻風致ニ乏シ、故ニ、四趣四季トテ、一ハ遠近、二ハ道路、三ハ水湖、四ハ堂
宇是等ノ位置經營ヲ心得テ、後文句ハ、規矩ニ据置キ、文意ノ外ノ餘情ノ深
クアラレトヲ描キ、且ツ彫刻スルハ、美術家ノ本色トセサルヲ得ンヤ

韓退之曰至
醫樂師百工
之入不耻相
師王大夫之
族曰師曰弟
子云者則羣
聚而笑之同
之則曰彼與
彼年相若也
道則相若也
早則相若也
盛則相若也
可謂知者矣
復可謂知者
醫樂師百工
之入不耻相
齒今其智乃
反不能及其
可怪也歟聖
人無常師孔
子師襄子其
弘師襄老聃
鄭子之徒其
賢不與孔子
則曰三人行
是必有我師
不必如師師
子不聞道有
後學有先
攻如是有已
不中不為
不為業甚淺



工

第四磨

第一用鋸

第二使鑿

台樂人 案考之如

俊明克用

場

第五仕上着色
或寫形

近環顧其中
未見可師者
雖貴好言論
為文章甚不
自是也才意
吾子自京師
未嘗見取僕
幸見取僕自
卜固無取假
令有取亦不
敢為人師且
衆人師且為
敢況敢為吾
子師乎孟子
稱人之患在
好為師由
魏晉氏以下
人益不事師
今之世不聞
有師有師
笑之有韓愈
不顧流俗犯
笑侮收召後
學作師說因
抗顏而為師
世果羣聚
罵指目牽引
而增與為言
詞愈以是得
狂名居長安
炊不暇熟又
挈不暇東如
是者數矣

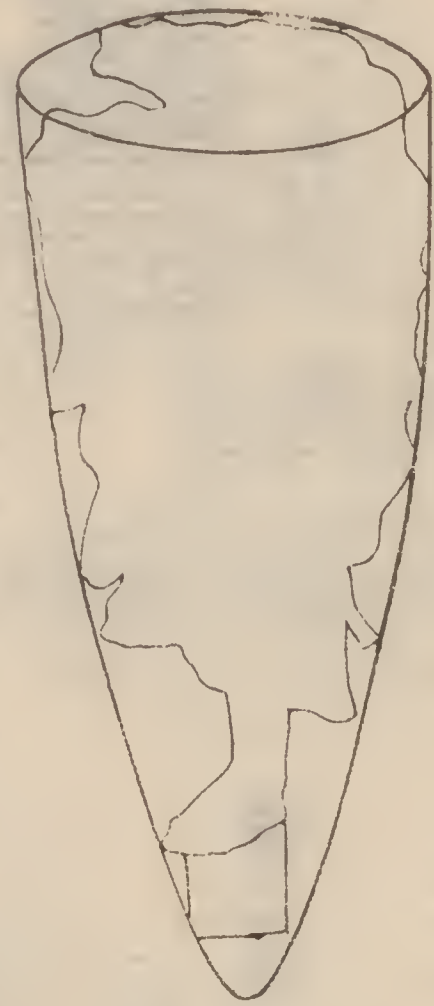
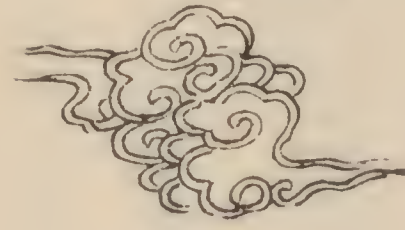


第三使小刀

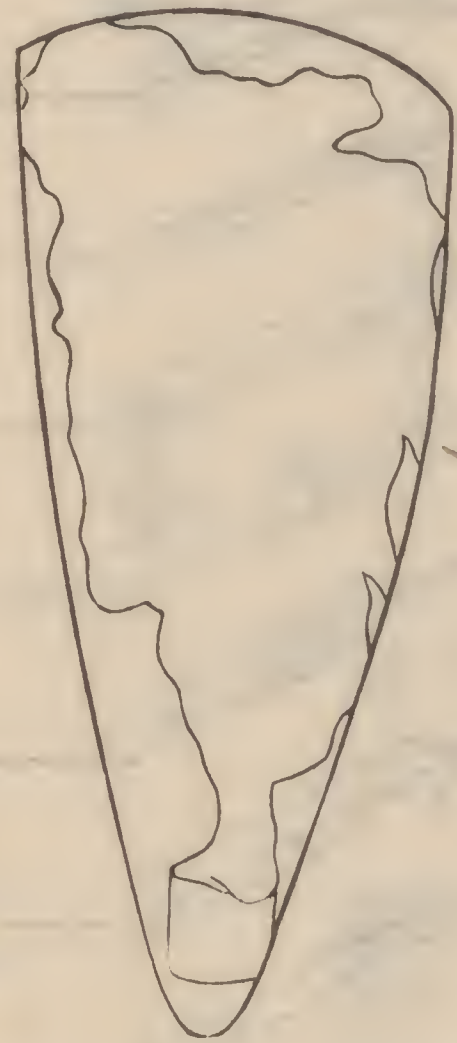
在山泉水清
出山泉水濁
社子美
避世嫌山淺
逢入說姓稀
唐崔塗

一 避俗愛鈍
象牙丸先陸落合木地高二寸七分蝦蟇之廣一寸一分
明治十九年三月廿六日作

模樣

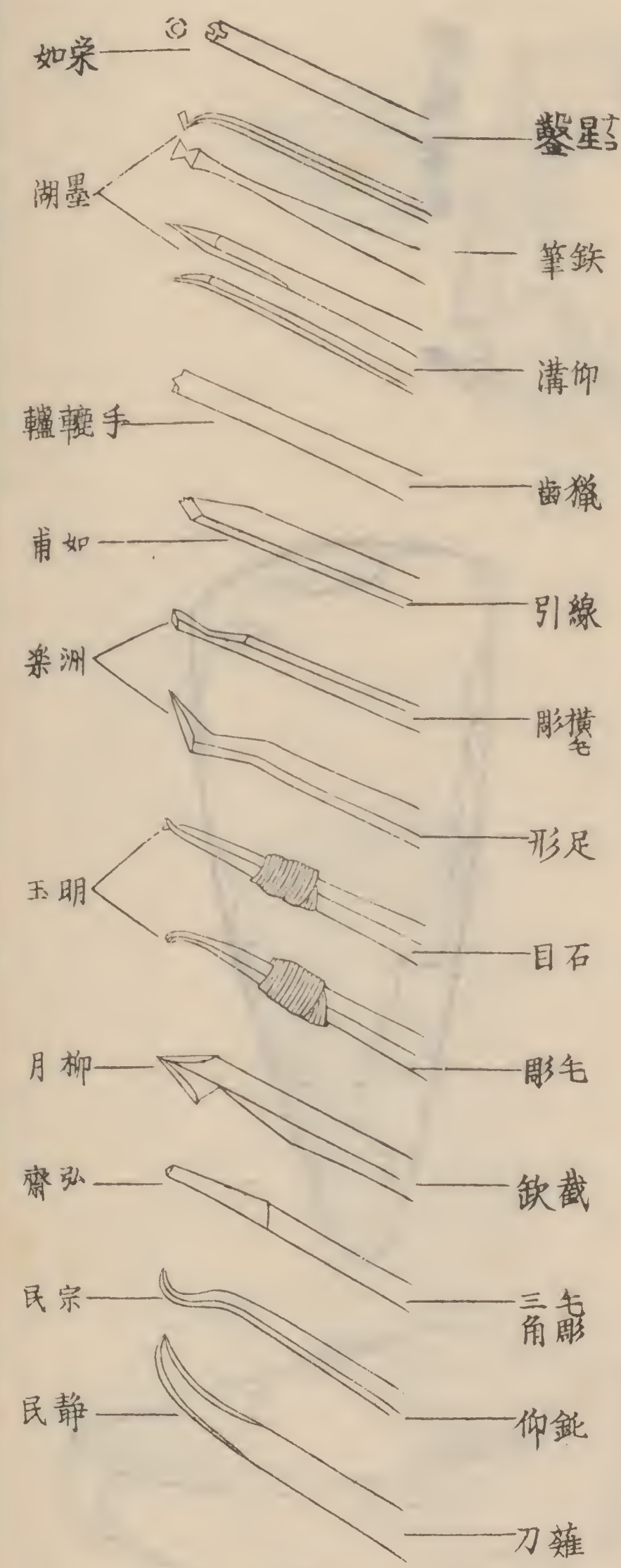


背面寫生



變形小刀

前ニ掲ケタル小刀ヲ以テ、一般ノ彫刻ヲナシ得ルト雖、更ニ又左ニ載セタル諸形ノ小刀ヲ用ユレハ大ニ便利ヲ感スヘシ、是皆實業者カ毛彫リ模様彫リ等ノ仕上ノ場合ニ臨ミ、適宜ニ改良シタルモノニシテ、其銚ト柄ノ長短ハ各自ノ便宜ニ造レルモノナリ、總テ是等ヲ研ク片ニ尤モ砥石ヲ撰ハサルヘカラス、蓋シ截味ハ元ヨリ下綱ニアリト雖、砥石ニ因テ利鈍ノ變更ヲ来タスモノナレハ、能ク之ヲ心得置クヘシ、



着色心得

○古代色

矢車

矢砂氏云當時矢車越幾斯ナ
ルモノ製出シテ尤モ便ナリナ

淡木

桃皮氏云是モ又淡木
越幾斯ナルモノアリ

矢車

茜根

或茶

録磐

○施色

丹柄

丹皮

矢車

茶汁

倍ニ晩茶ト云時々加ヘテ年
中消渴セサルヲ用ユヘシ

○補裨色

施

蘇木

黃柏

象牙彫刻品ニ用ユル漆艸漆皮類ハ、大畧如斯モノニシテ、此漆材料ヲ煮ルニハ、尤モ鉄釜ヲ忌ムヘシ、青銅又ハ銅鍋ヲ用ユルヲ好シトスレ、氏土鍋ニ過キタル者ナシ、而シテ着色以前ニ酢汁ヲ以テ先ツ象牙ヲ煮和ラクルヲアリ、諸亦着色ノ濃淡ハ時々ノ流行ニ沿テ變更スルモノナレハ、斯ニソノ法ノ一定ヲ示ス難シ、故ニ當ソノ心得ヲ記シテ參考ニ拱スルノミ、以下二十二設題迄ノ製作物ニ施色シタルハ皆之ニ倣ヘリ、

莊子曰：「履之
人夜半生其
子遠取火而
視之，汲然
唯恐其似已
註曰：惡人生
子恐其似已
是自知其惡
也。彼且自知
而世之惑者
皆不自知，則
不知厲人矣。
以前面大惑
終身不解，大
愚終身不靈。

二 主美弃醜

丸先 高四寸底濶一寸三分
明治十九年五月一日作

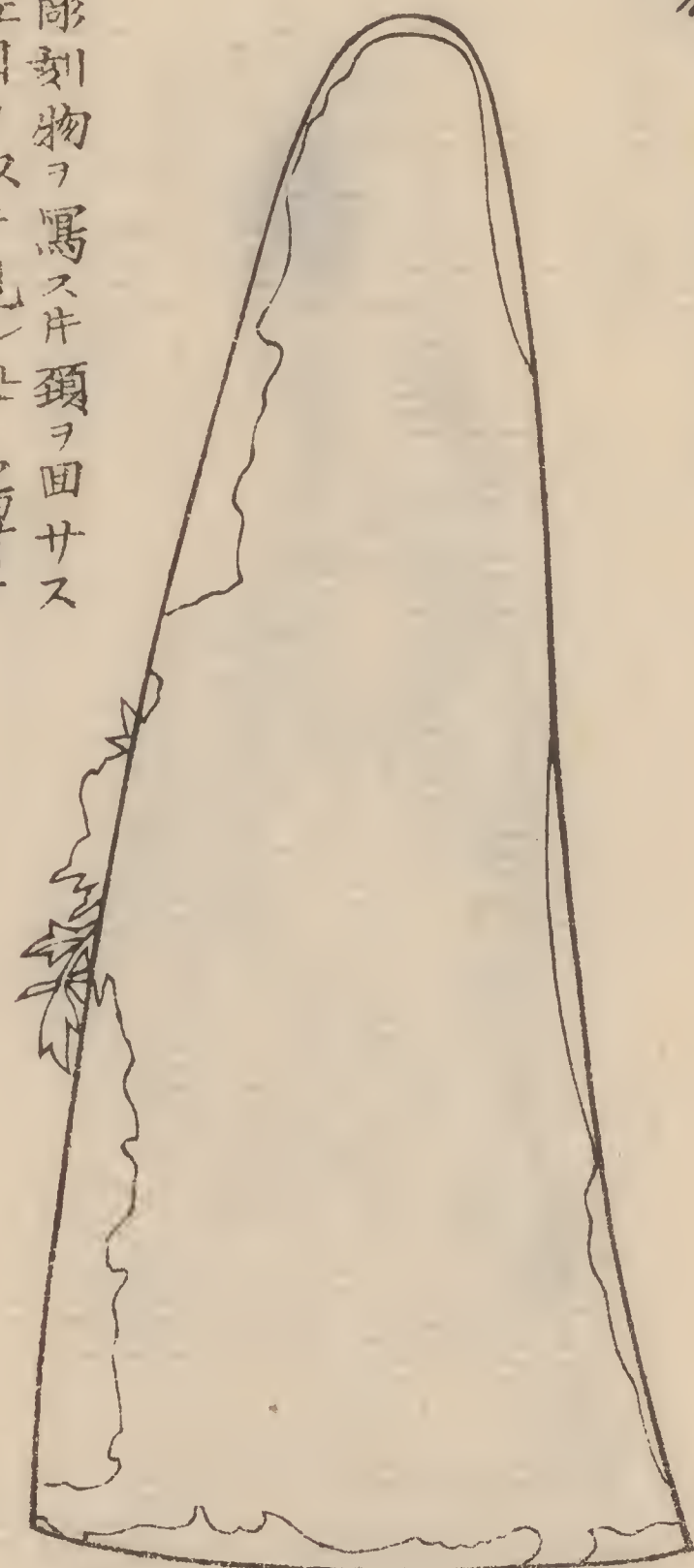


底濶一寸五分



底淵一寸七分

本地外ニ出タル輪廓ハ該彫刻物ヲ寫ス并頸ヲ回サス
 軀ヲ振サス凡右目ヲ閉ジ左目ヲ以テ見ル處ヲ寫者ナ
 レハ少ク裏ノ部分ヲ前面ニ浮伸シテ寫シタル者ナリ
 凡テ本地外ニ出タル筆痕ハ如斯モノト知ルヘシ



底淵前部同



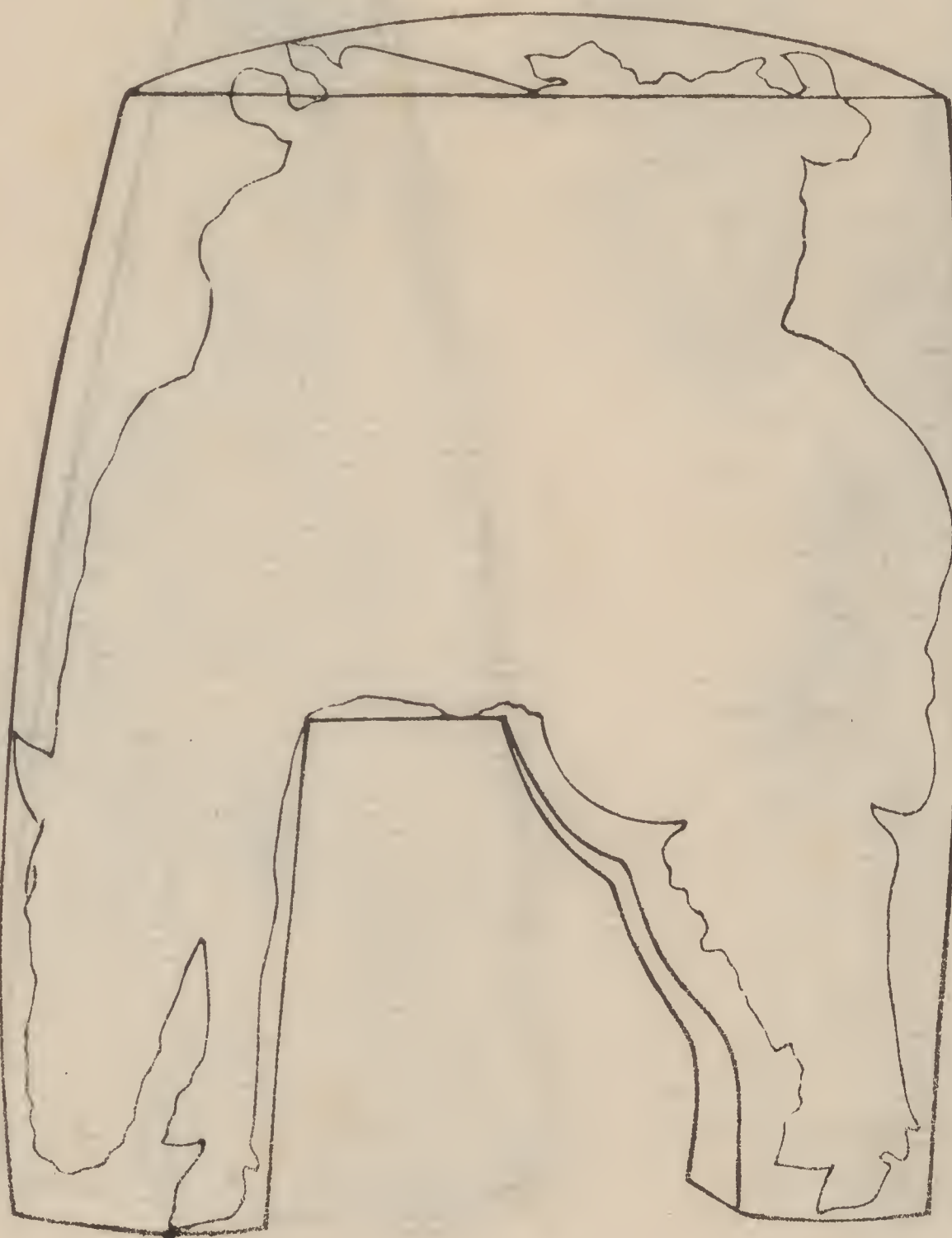
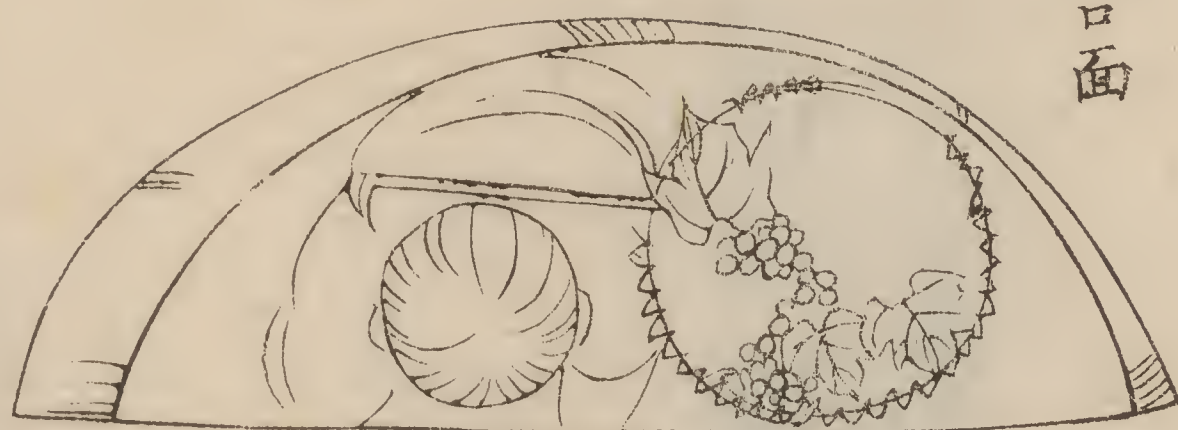
燕外山將遍
人間日易斜
不知綦換世
柯爛未還家
李俊民

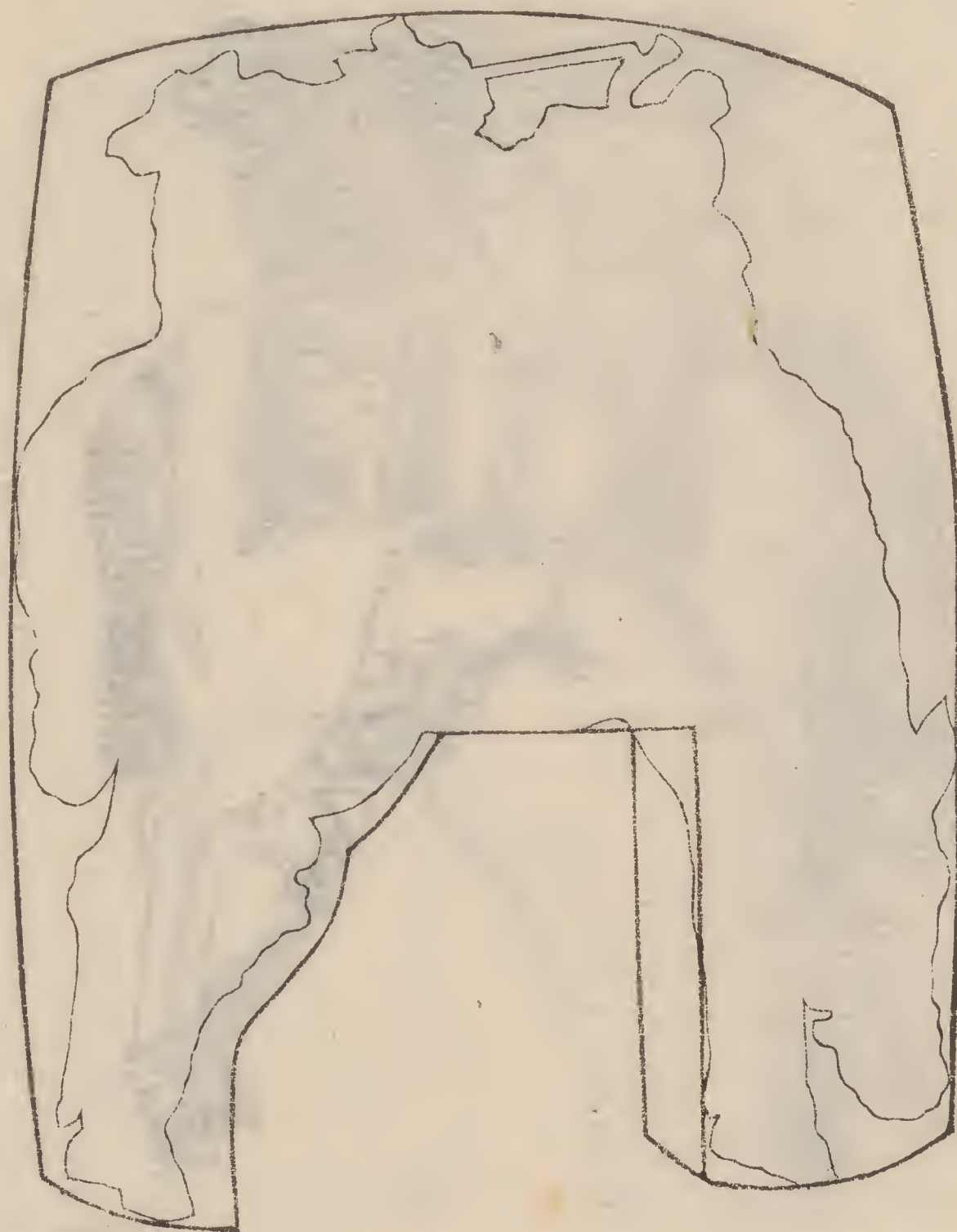
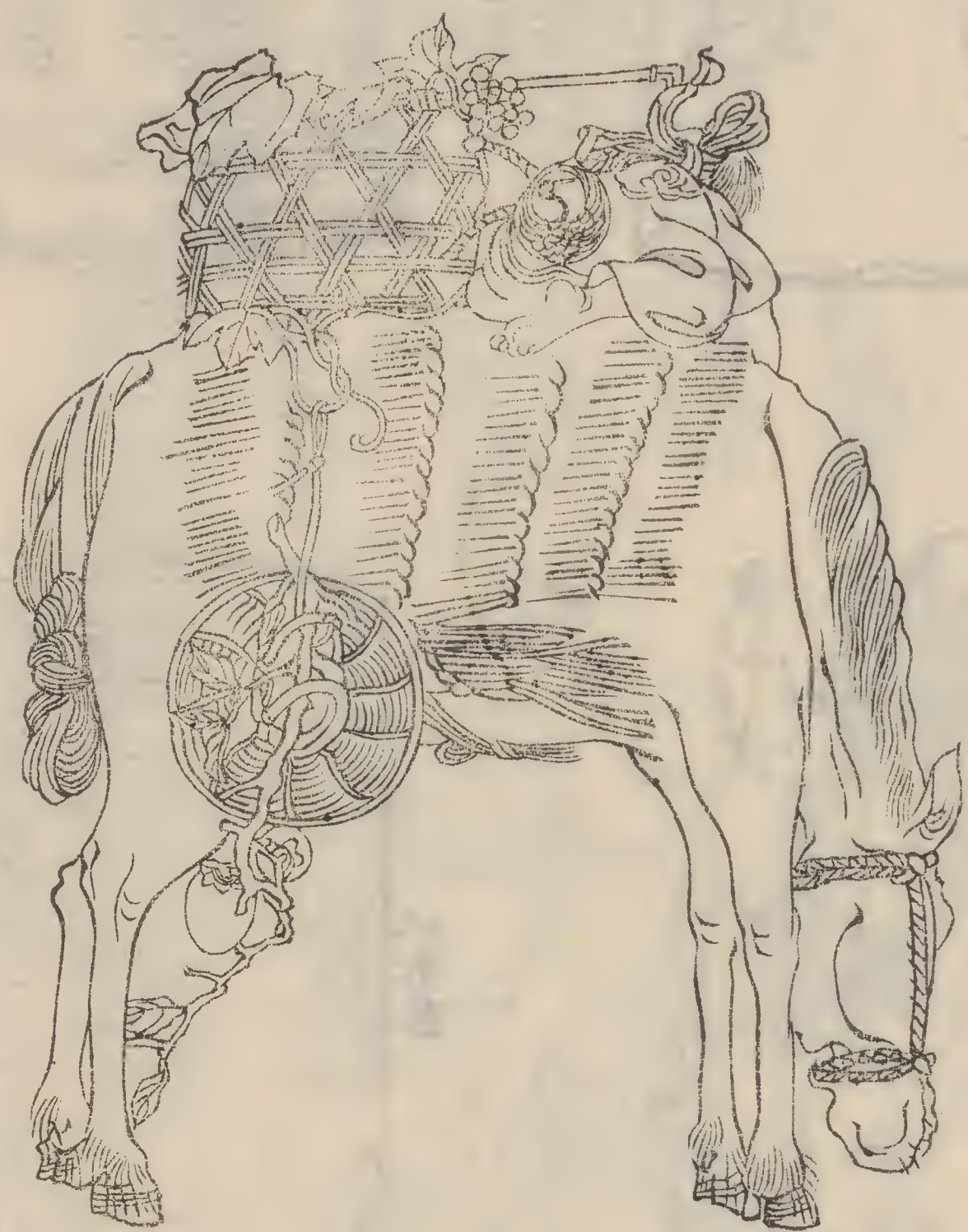
三牧童思婦

割木地

高三寸五分 上巾寺六分 中巾稍廣 下巾二寸九分
奧巾一寸 明治十九年六月廿五日

截口面





合製全圖



細牛房

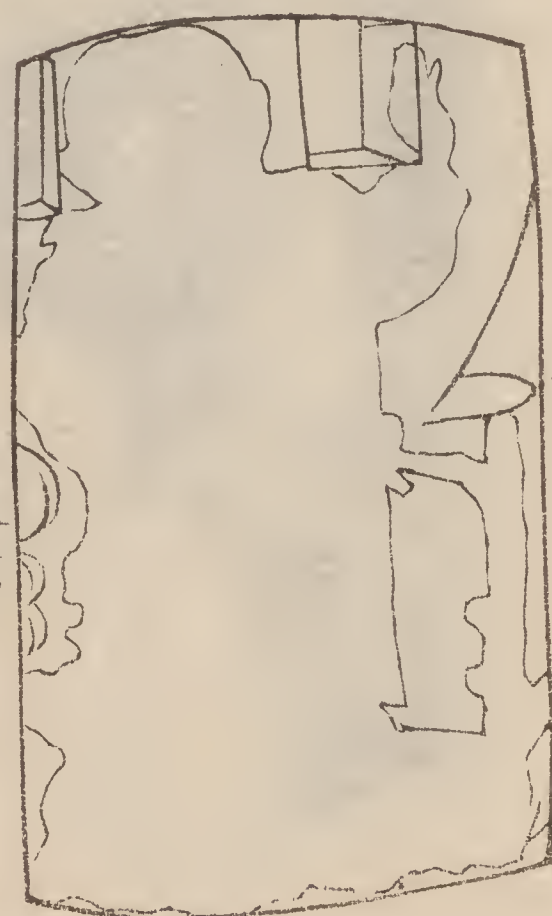
高二寸三分巾一寸四分上與一寸二分底稍濶



鋸跡



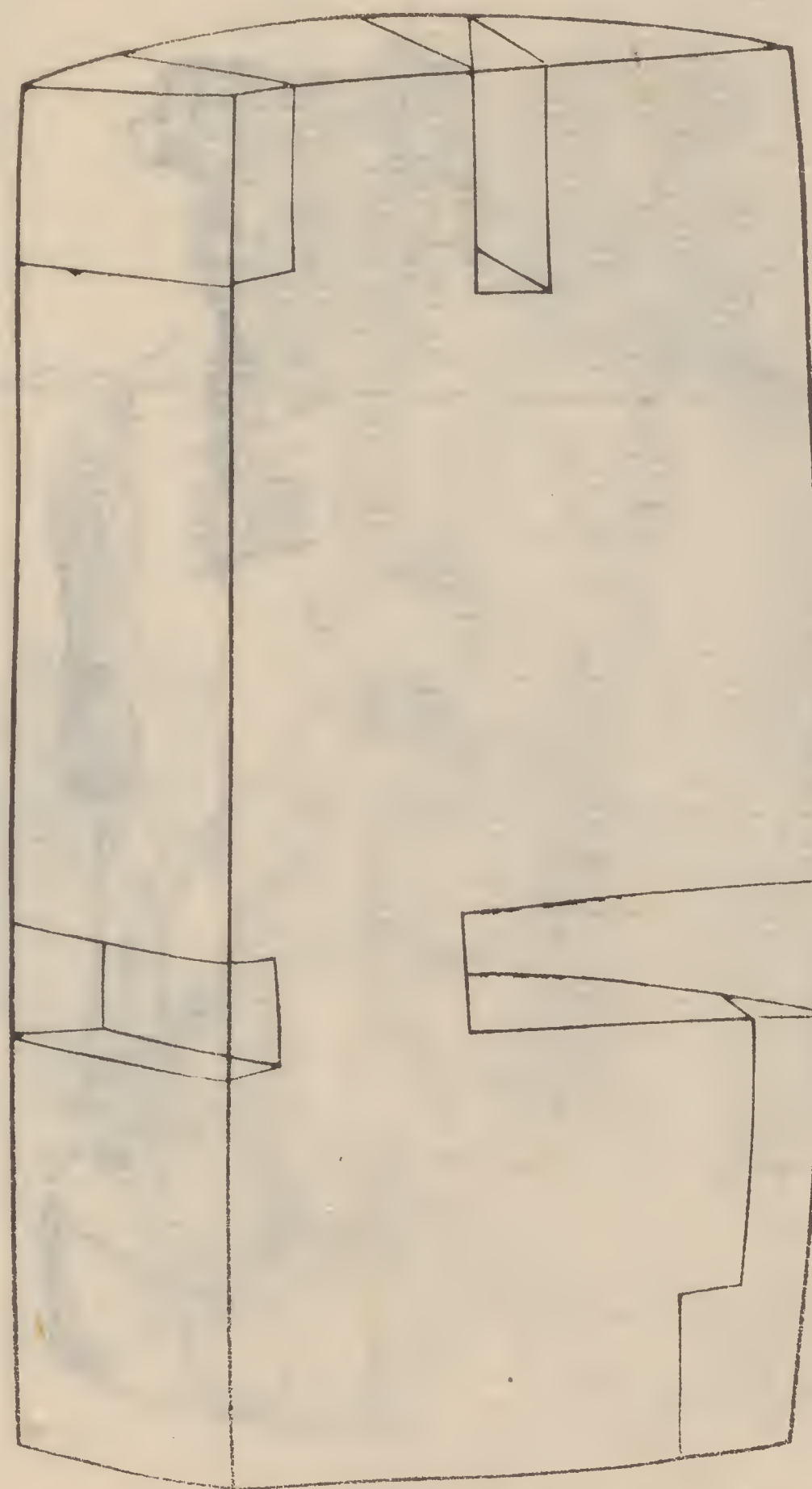
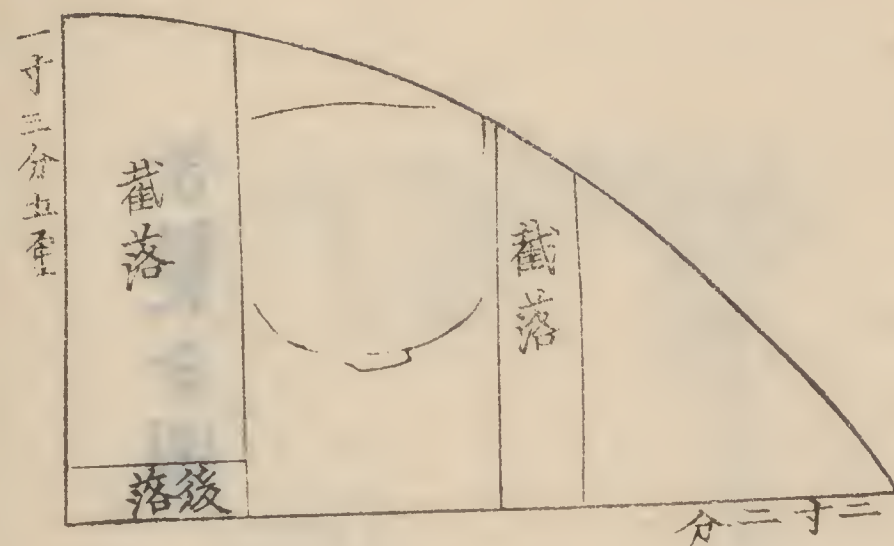
木跡



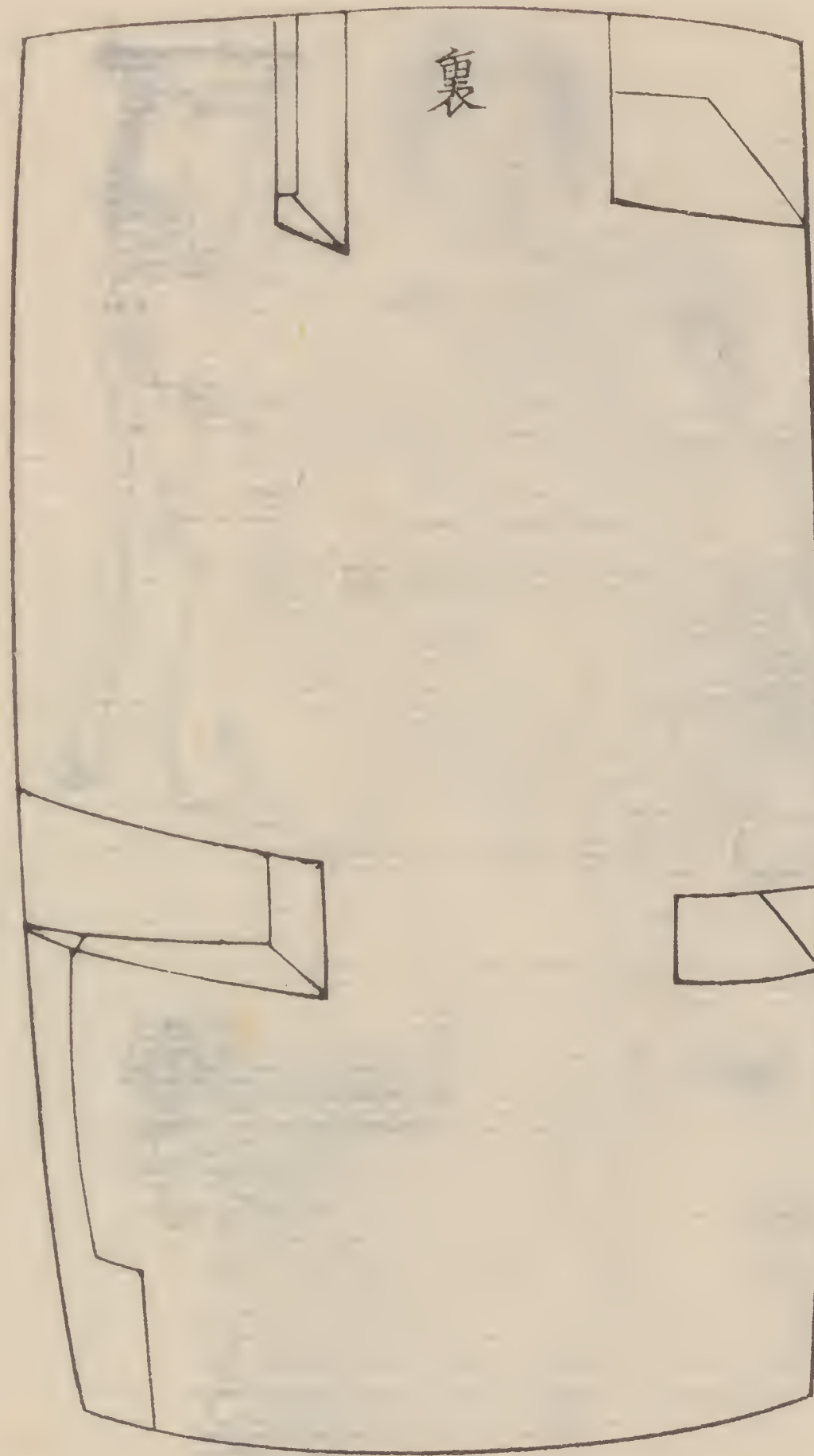
子曰、姓相近也、習相近也、淮南子曰、楊子見蓬路而哭之、為其可以南、可以北、黑子見練絲而泣之、為其可以黃、可以黑、高誘曰、憫其本同而末異、

四 育兒嬉戲

撥落ノ三角木地 高四寸六分 前巾二寸二分
與巾一寸三分五厘 明治十九年八月一日



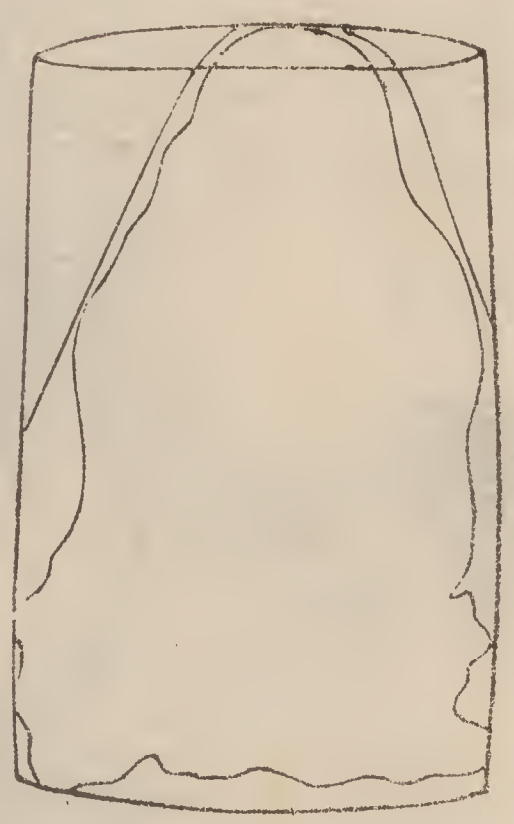
材料ノ如何ニノ
 三 拘泥シテ彫刻
 セハ活潑ナル勢
 カヲ加フル能ハ
 スシテ透徹幽旨
 ラ妙趣ヲ失フ故
 ニ冗沓地ノ出ル
 ヲ惜マス切斷ス
 ヘキハ切斷シ然
 レハ其彫刻物ノ
 小縮セサルヲ注
 意スヘシ



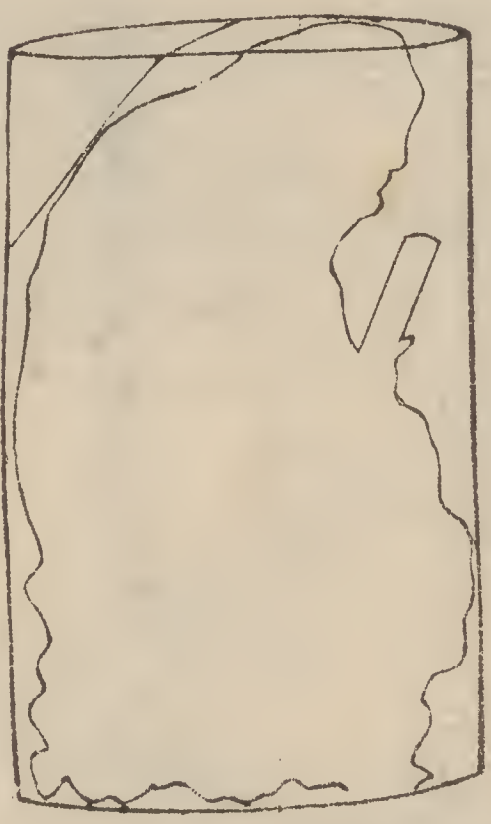
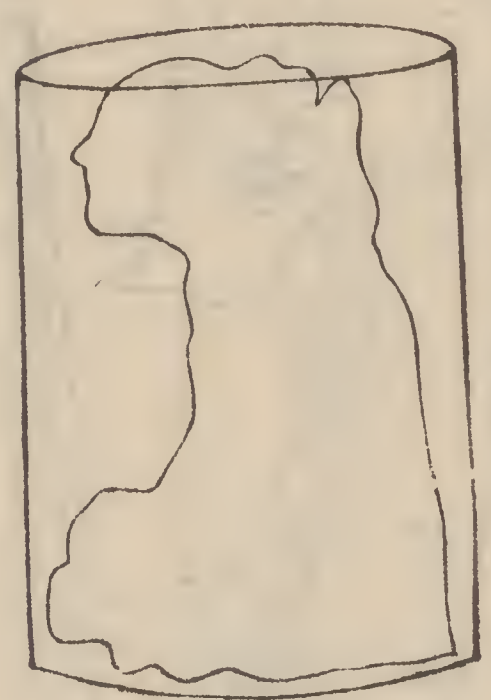
孟子曰、為長者折枝、語人曰、我不能、是不為也、非不能也

五 勿侮長者

樟腦木地俗人造象牙ト云、黃石公、高二寸巾一寸三分、張良、高一寸六分巾一寸一分五厘、明治十九年八月十一日作



此ノ本地ハ水彫小刀ヲ用ユヘシ、黃石公張良共ノ模樣ヲ附セズ



烏夜啼
 慈鳥失其母
 啞々吐哀音
 晝夜不離去
 經年守故林
 夜々夜半啼
 聞者為沾襟
 聲中如告訴
 未盡反哺心
 百鳥豈無母
 爾獨哀怨深
 應是母慈重
 使爾悲不任
 昔有異起去
 母致不臨
 哀哉若以輩
 其心不如禽
 慈鳥復慈鳥
 鳥中之曾參
 白樂天

六 猫兒失母 午房本地玉截上云 高四寸六分 底巾一寸八分 上巾一寸四分

明治十九年八月廿九日作



初心ノ克ク用ユル材料ナリ

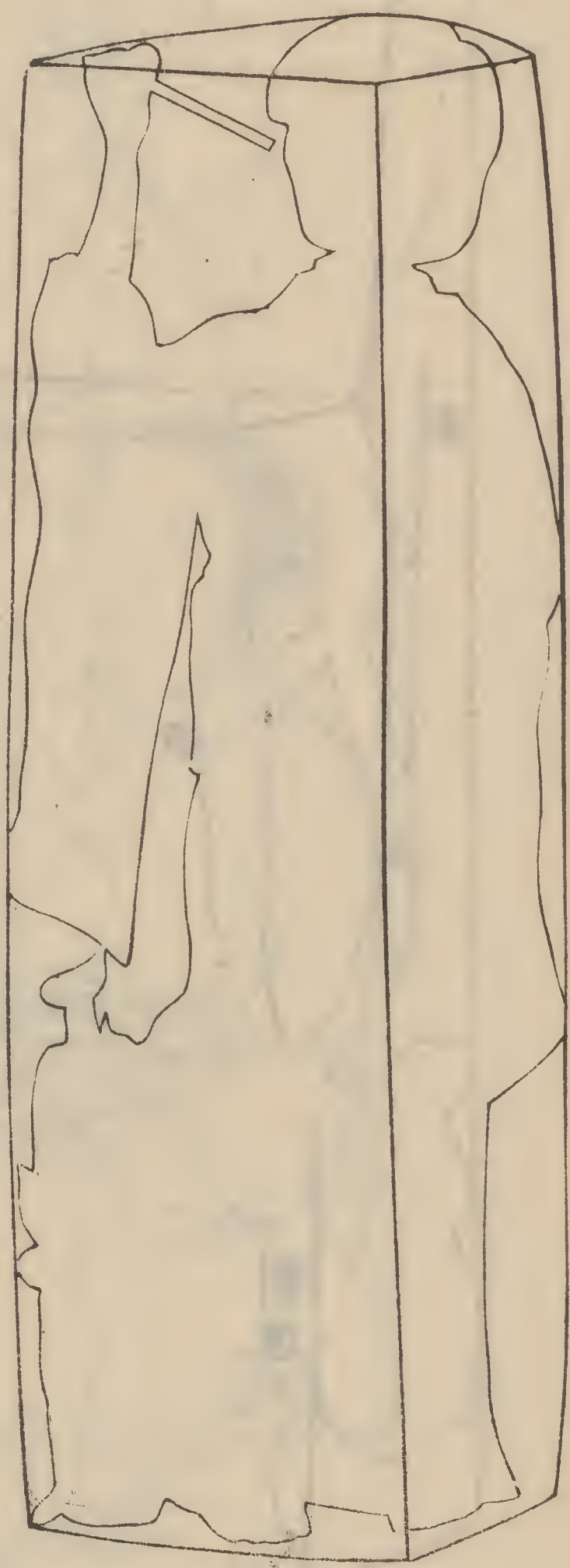
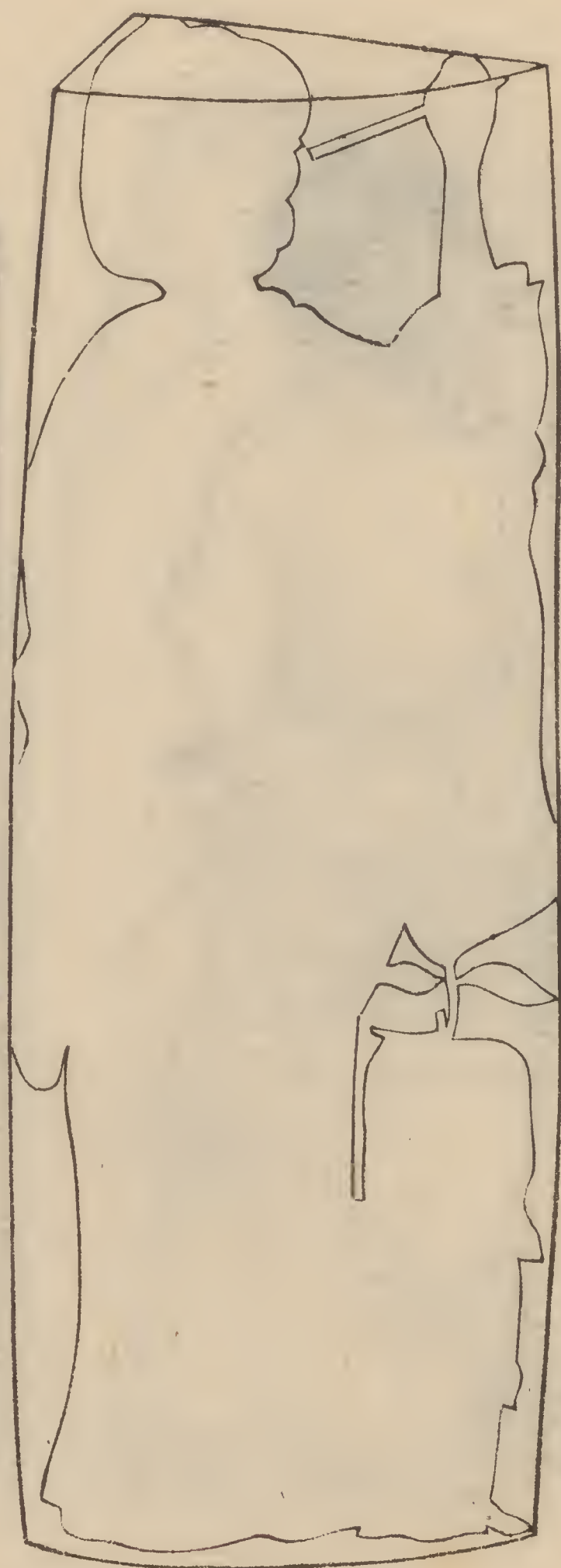


仙翁

大下乾

詩云鴈鴒在
桑其子七兮
淑人君子其
儀一兮其儀
兮心如結

七 婦容可愛 撥落三角木地高寸二分巾一寸九分上下同
明治十九年十月廿三日作

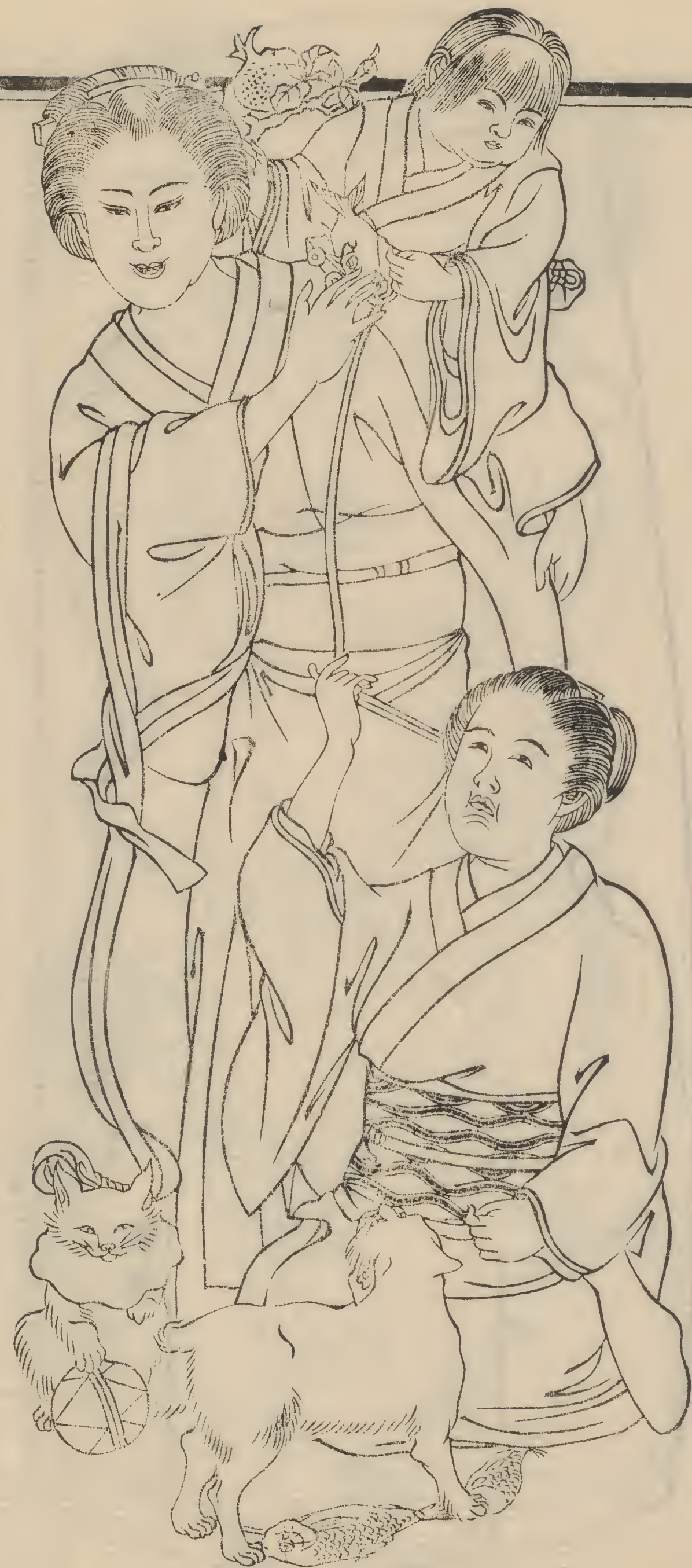
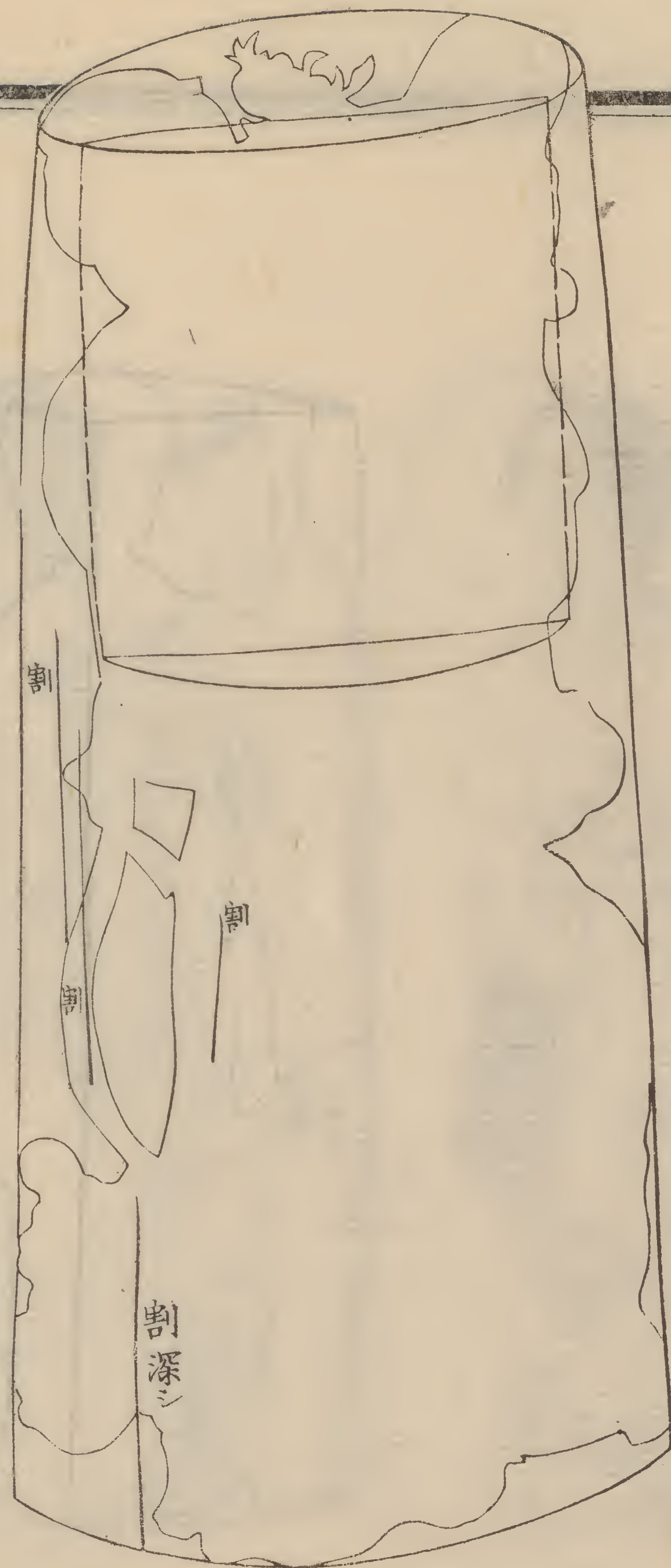


孟子曰
老以及人
幼以及人
及老幼以

八 新婦愛兒

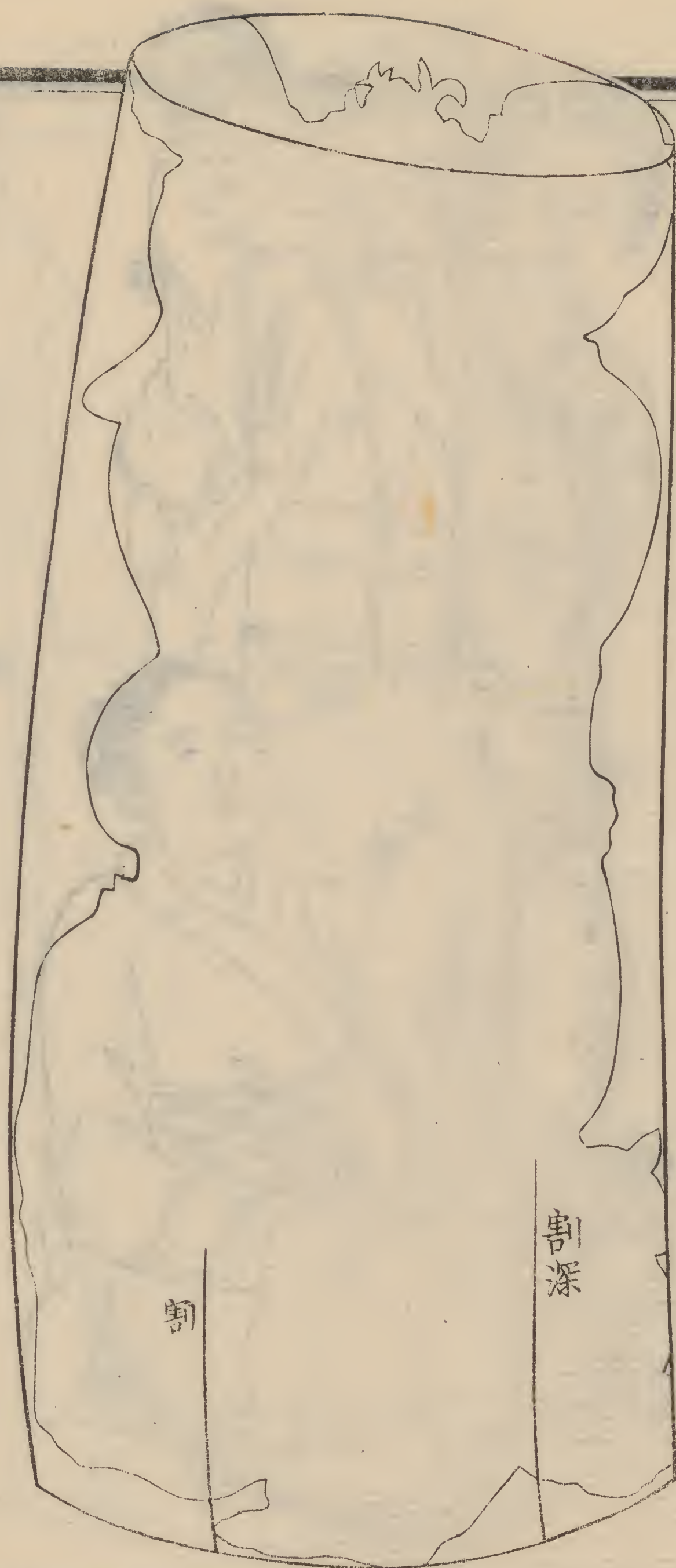
大玉截 高六寸七分 巾三寸 奥巾凡三寸 分割深

明治二十年二月廿六日作





材料ニ割アルキハツノ左右ニ鑿ヲ使ハス只割ニ方ヲ穿
ツテ後圓ヲ案スレハ落成シテ材料ノ小縮ヲ見サルヘシ



割

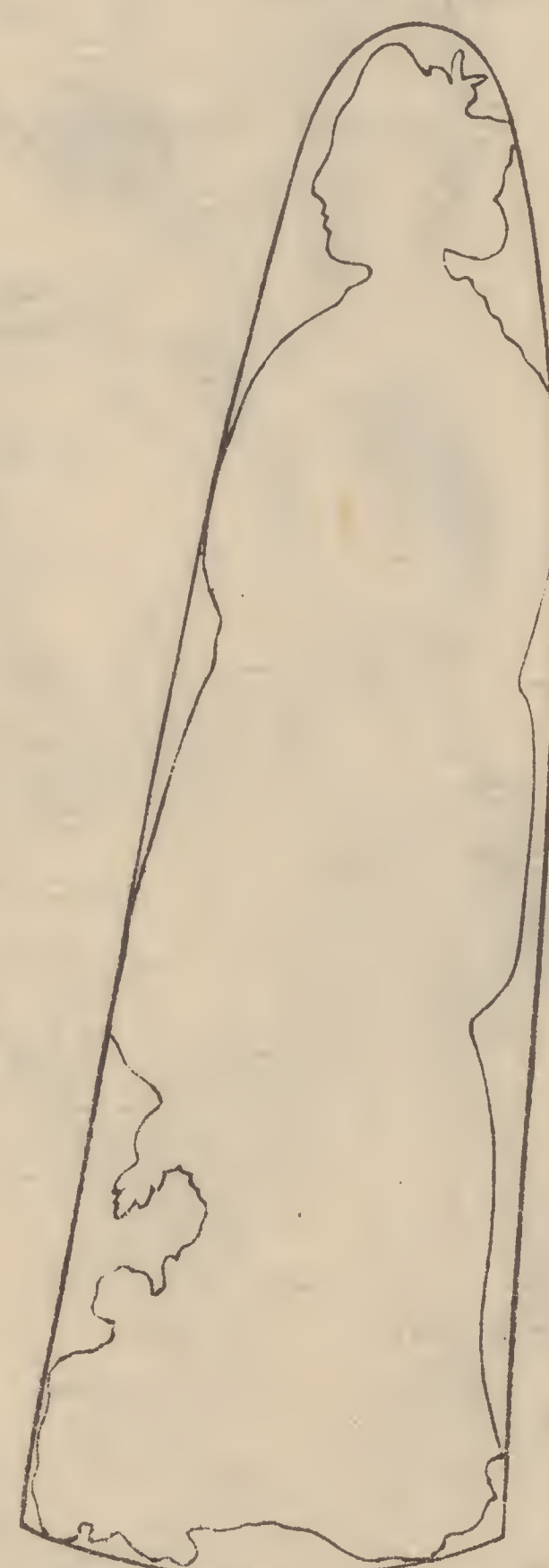
割深

孫叔敖母曰
有陰德者天
報以福

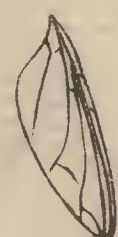
九 蚋蜂逃生

九先 高四寸五分 底一寸四分 上市如圖
明治二十年四月二日作

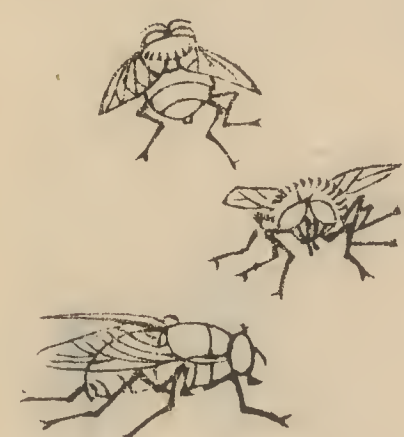
蜂



蚋



底巾一寸一分五厘



裏底巾一寸三分

端壤



田公喜
菊

参考



公美
飾籃

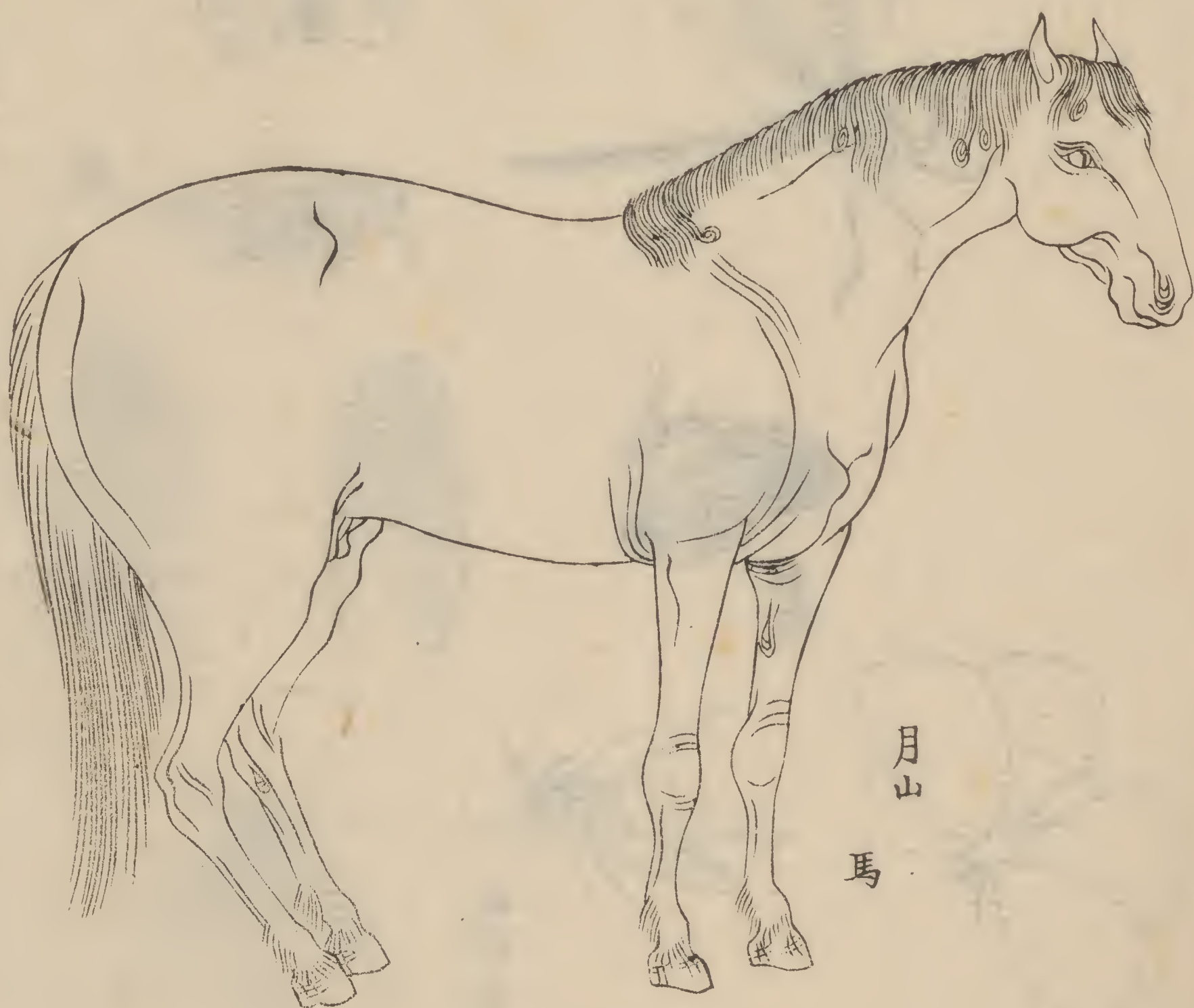


鸚鵡

猫



月山
馬



蜂蛸ヨリ茶蝶ニ至ル迄
ノ間ノ諸圖ハ彫刻物ニ
アラスシテ唯名家ノ画
又ハ寫生ノ曲ヲ示シテ
彫刻上ノ参考ニ供セ
シモノナリ

象牙彫刻法乾終



134
.56
v.1